
僕とキミの歌

R U I

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕とキミの歌

【Nコード】

N9010A

【作者名】

RUI

【あらすじ】

同性愛の話を書いたものです。日本ではまだ差別などが多いので、これを読んでこんなこと考えてたんだって思ってくれたら嬉しいですよ!!

出逢い

僕は歌を唄ったんだ

キミと二人でいたあの頃の歌を…

三年前のあの夜の日キミと出逢ったんだ

きっとそれは誰もが気にも止めないような出逢い方だったんだと思う
でも僕にはすごく… すごく大事な出逢いだったんだ

「キミが光君

？」

「はい、心さんですか？」

二人の始まりはここから

友達

僕の名前は柊光 ひいらぎひかる

彼の名前は桜井心 さくらいしん

…そう僕らは同性愛者。

普段の生活の中ではそのことは誰にも言えない。

だからケータイの出会い系サイトで同じ悩みを持った友達を探す。
待ち合わせしたのはとある駅前。

「どこにいこうか？」

「オレ飲みにいきてえ」

と心が言う。

とりあえず何も知らないことが多いので簡単に自分のこと話した。

相手はどうやら、隣の駅の居酒屋で働いているらしい。

僕はというとまだ大学生だった。

その日は初めて会ったというのもあり、様子の探り合いで終わった。
テレビで出会い系サイトが原因で起こった事件をよく目にしていた
ので、かなり警戒していた。

「じゃあまた飲みにいこうね」

「そうだな。今度はいつにする？オレは毎週月曜が休みなんだ」

「そうなんだ。僕はバイトが終われば遊べるから」

と、お互いの事情を話しつつ僕は電車に乗った。

次の日、学校を終えバイトにいった。

「光う！！おはよう！」

一人の女の子が話かけてくる。

彼女の名前は、田中由樹 たなかゆき。

僕が同性愛者だということを知っている唯一の友達だ。

「ねえねえ、昨日会ってきたんでしょ？どうだった？」「うん。まだ会ったばかりだったから何とも言えないけど見た目は良かったよ！（笑）」

「またアンタはそういうこと言ってる和前と同じ目に遭うよ！」

「ははっ。大丈夫だよ。今度はちゃんと相手見るから」

そう…警戒してた理由はテレビともう一つある。

どうして由樹が相手を選べと言ったのか。

理由

前に付き合った彼氏。

名前は瞬^{しゅん}。

一年付き合い、別れた。

すごくいい人だったんだ。初めのうちは、とても優しくて頼りがいがあって大好きだった。でも三ヶ月、半年経つうちに本性をだしていった。他の男とは浮気をし、それを悪いことだとも思っていない。

僕と年はそう変わらないのに借金は300万近くあり、最後には僕の体売って借金を返そうとした人だった…

人を信じるのが恐くなり、独りでいいと思った瞬間だった。

「あの時のこと忘れたわけじゃないでしょ!？」

「もちろん忘れてないよ。大丈夫だよ!もう誰とも付き合う気ないんだから」

「ホントお?じゃあなんで会いにいったの?」

「友達になれるかなあって」

「だったらいいけど…」

由樹はかなり心配した様子だった。当たり前だ。僕が同性愛者だと知ったのは瞬のことがきっかけだったから。もともと口がうまかった瞬が借金を返す話を僕に持ちかけてきた時に、すごく悩んでダメもとで相談した相手が由樹だった。由樹は驚きもせず話を聞いてくれて、

「アンタそれ絶対だまされてるよ!そんな男やめなさい!」

と言ってくれた。僕のことを受け入れてくれて、真剣に相談に乗ってくれた由樹。一生かかってもこの人に僕が受けた恩は返せない。そう思った。

バイトが終わり、家に帰りテレビを見ていた。

そのとき一通のメールがきた。

桜井心からだった。

「来週時間があったらまた飲みに行かない？」

夢

僕は来週のバイトのシフトを見た。うん、空いてる。別に他に予定もないしいいかな？

「別にいいよ。じゃあまた同じとこでいい？」

五分後…

「りようかい」

一週間後…

駅に着いた僕は待ち合わせ場所に向かった。外に出ると霧雨が見える。

「あーあ、さっき降ってなかったのに…」

近いから別にいつか。

すると、向こうから心が走ってきた。

「わりい、待った？」

「いんや、今来たところ」

「そつか。じゃあ行くか。」

雨の中二人で走った。

店に着くと前と同じくやつぱりお互いビール。前回と違ってなんとなく話しやすい雰囲気だ。

「ねえ？居酒屋で働いてるんでしょ？社員なの？」

僕が聞くと、

「いや、バイト」

「へえ、僕今20才だけど、心は？」

「25」

「居酒屋って夜中まで大変だよねえ」

「別に」

… 会話が続かない。こんな会話で相手は楽しいのかな？

こっちは全然だよ…

「ちつとトイレ行ってくる」

心が席を立った。

「はあ… なんか空気重い」

僕はケータイを開き、書きかけの詩の続きを書き始めた。

ホントに趣味の範囲だけど、僕にとっては日記のようなものでその時の気持ちを詩に書いている。

心が戻ってきた。

「メールか？」

「いんや、詩を書いてるんだあ」

「へえ、そうゆうの興味あんの？」

「そうゆうのって？」

「作詞とか」

「そんないそなモンじゃないよ。ただ書くのが好きなだけ」

「ちよつと見せてくんない？」

「やだよ。恥ずかしいもん」

「いいじゃん。別に」

「じゃあ今日おごってくれたら見せてあげる」

「いいよ。じゃあ貸して」

うつ… マジで？？もうなんだかんだで結構な値段いつてるのに。。

「そんなに見たいの…？」

「いいから見せてよ」

「わかったよ」

僕は渋々ケータイを心に渡した。

…すごい真剣に見てる。そんなに珍しいものじゃないのに。つかよく見たら、読みながら頷いてるし…

何に納得してるんだよ一体!?

「いいじゃんこれ。オレが曲つけてあげよつか?」

「えっ?心、そんなことできるの?」

「できるよ。オレ自分のバンドで作曲してっから」

「バンド??やってるの?」

「ああ、言つてなかったっけ?」

「聞いてないよ!っかそんな適当な詩に曲つけられるの?!」

「いける。結構まとまってるし、少し手直しすればつけられるよ」

「すげえ!やってやって」「じゃあ少し直すか」

ああだこうだ言いながら、一時間くらい話した。

その時間は、さっきの重い空気とは違いお互いが自然な感じだった。

「こんなもんだろ」

「へえ、こんな感じになるんだあ。すごいね心は!」

「別に凄くねえよ。これくらいできなきゃ、人前で歌なんか歌えないし」

「じゃあいつかはデビューするの?!」

「あつたりまえじゃん!いつかはみんなの前でオレが作った曲を聞いてもらうんだ!」

その時の心の顔は忘れない。きっと僕が今まで見てきた人の中でも一番がつくほどの笑顔だったから。

心の生き方やその笑顔に、少し僕の心は動いていた。

強制認識

それからは僕は毎週のように会うようになった。
毎回同じ居酒屋、最初はビール、途中からは決まって僕が書いた詩
を二人で手直しする。
そんな日々がしばらくつづいた。

「何やってるの光？」

由樹の声。

「ん？ああ、詩を書いてるんだ。」

「詩？光書けるの？」

「うん、まあね」

「すごいじゃん！見せて見せて！」

「いやまだ見せるほど書いてないよ」

「いいじゃん！」無理矢理取り上げられた…

「…ってまだ一行じゃん…」

「だからまだ書いてないって言ったじゃん」

「でもなんで詩書いてんの？しかもバイトの休憩中にまで」

僕は由樹に心のことも含めて今までのことを話した。

「ふうん…アンタその心君が好きなんでしょ？」

「えっ？！なんで？！」

「なんでってそんな笑顔で話したら誰でもわかるって」

「どうやらすごい嬉しそうに話してたみたい。」

自分では全然気付かなかったけど…

「別に好きじゃないよ」

「じゃあなんで詩書いてるの？」

「書きたいからだよ」

「へえ、今まで休憩中に書いてたことあったっけ？」

「ないけど…」

「次に心君に会うときまでに書いておきたいんじゃないの？」

うつ…するどい。っーかここで書いてて、さっきの話聞いたらだれでもわかつちゃうか。

「そうだけど。まだ好きがどうかなんてわかんないよ。ただ…ほら！新しいの書いていくと喜ぶしさ！歌の話してるとなんかいい顔するんだよね！それにその話じゃないと会話が續かなくて、なんか淋しいんだもん」

「たぶんそれって世間一般で【好き】って言うんじゃない？」
はうつ…ばればれ。

「認めちゃえばいいのに」

認めてるよ…でも認めたくないんだ。また誰かを好きになって、もし同じ目にあつたら僕はもう立ち直れない…

「今、瞬のこと考えてたでしょ？」ぎくっ！こいつは何でわかるんだ！？

「なんでわかつたの…？」

「アンタ顔にすぎだよ」

「そうかなあ…」

「そうだよ。ちなみに今考えてることもあててあげよっか？」

「何？」

「その人のこと好きって認めて、もし付き合うようになってまた同じ目にあつたらどうしよう…って。どう？」

「…当たり前です」

「やつぱり…」

「だから好きになったなんて認めたくなかつたんだよ。前のことがあるから」

「アンタさあ、まだ付き合うつて決めたわけでもないのに、考えることが早すぎだよ！別に好きだつたら好きでいいじゃん？」

「…うん。でも好きだつて自分で認めちゃつたら、速攻で告っちゃう気がする。今はこの関係続けていきたいからさ」

「それはそうかもしれないけど、それって辛くない？淋しくない？」

「そりゃ淋しいけど、仕方ないじゃん…」

「私は会ってないからなんとも言えないけど、別に感情おさえる必要ないんじゃない？素直が一番だよ！」

「無責任だなあ…」

「そんなことないよ！じゃあアンタはこれからそうやってこれから好きになった気持ちごまかして生きていくの？」

「だってそうするしかないじゃん」

「そりゃ無理だね」

「何で？」

「だって人間って誰かを一回好きになったら、独りで生きていくことなんてできないもん。無意識にまた誰かを好きになっちゃう。だったら何度傷ついても頑張らなきゃ！アンタは幸せになる努力してないだけだよ」

「…」

言葉を失う僕。確かに由樹の言うとおりだ。はわかってはいるけど、その度にあの時の辛さが頭をよぎる。

「わかった！？アンタは心君が好きなんですよ？いい加減認めなさい！はいっ！決定！以上！」

「はい…」

こうして僕はかなり強引に認めさせられた。

なんだか嬉しいような辛いような変な気分だった。

でも確かなことは由樹がいてくれてよかったってことだ。

そう…あの日までは。

与える強さ

「ここはこうじゃない？」

「ああ、そっちのほう伝わりやすいな」

相変わらずの二人。

いつもの居酒屋で、詩の手直し。店内には少し淋しい音楽が流れている。

「これで何枚目くらいだ？」

「んーと、40枚くらいだった気がする」

そう。もうなんだかんだで心と会ってから一年くらいたってるんだ。僕の気持ちのほうは、不思議なくらい落ち着いている。好きって気持ちは変わらないけど…

「明日も学校か？」

「うん。でも明日の授業は別になくても平気そうだから、さぼろうかと思ってる」

「じゃあ、オレんちこないか？」

「えっ！！？」

突然の誘いによりかなり驚く。一年の間、こんな関係が続けて来たものだから、急にそんなこと言われても心の準備が…

「……お前変な想像してるだろ？」

「えっ！？してないしてない！」

「うそつけ。顔にすぎだから」

うっ…。やっぱりわかりやすいのかな僕ってば。。

「そんなことしねえから安心しろ。今まで光が書いた詩に曲つけて

きたけど、お前一回も聞いてないだろ？聞かせてやろうと思ったんだよ」

「あっ！そういえばそうだよ。一年くらい経つのに一曲も聞いたことないや。……あれっ？今名前で呼んでくれた！？」

「わりいかよ？」

「うっん！全然悪くない！」

この時が実は初めて心が僕のことを名前で呼んでくれた瞬間だった。それまではおい、とかあのさあ、ばかりだったからなんか嬉しかった。

「んで、くんの？こないの？」

「行く！行くよ！聞きたいもん！」

「じゃあ、これ飲んだら行くか」

店を出ると、街は妙にがらんとしていて少し不気味だった。

「なんか人少くない？」

「そついやそうだな。まあそんな時もあんだろ。ほら、行くぞ。ウチ歩いてすぐだから」

少し歩くとマンションが見える。結構大きいマンションだ。入り口のロックを解除し、自動ドアを通り3階へいく。

303号室。【桜井】すごい綺麗な字だな。詩を直してるときも思っただけど、心って字上手なんだよねえ。「ここだよ。入んな」

中はいやに殺風景な部屋だった。余計なものが一切ない。あるのは家電とベッド、ギターと音楽に関する本だった。

「こっち座れよ。今コーヒーでもいれっからよ」

「あっ、別にいいよ。」

「いいから待ってる」

相変わらずだなあ……

「その間どれが聞きたいか選んでろよ」

僕の前には、ばさつと詩が置かれた。

よく考えたらこれに全部つけたのかなあ？

あつ、これ結構好きだったんだよなあ。これも懐かしい！

とかやってる間に心がコーヒーを持って僕の隣に座った。

「決めたか？」

「うん。これがいい！」

「あいよ」

そう言つと心は傍らにあつたギターを手にとつた。

「ちよつと待つて！」

僕は慌てて止めた。

「なんだよ。違つのにすんのか？」

「そうじゃなくてこんな夜中にギターひいて、近所迷惑じゃない？」

「大丈夫だよ。このマンション、どの部屋も防音工事がしてあるから。そのためにわざわざここ選んだんだよ」

心の音楽にかけるものが伝わってきた。わざわざその為ここに住んでるのを考えたら、本気で音楽の道に進みたいんだ。

「じゃあ始めるか」

心の指先から流れるメロディーと歌声。よく考えたら心の歌を聴くのはこれが初めてだ。

澄んだ声。決して声が高いわけじゃないんだけど、なんとなく心の中を通すような声だった。

少し切ないメロディーがより一層心の歌声を際立たせる。

あつという間に曲は終わった。

「どうだ？」

「心の歌声が綺麗だったなあ……」

「いやそつちじゃなくて、曲のほうだよ」

「……ああ！なんか切ない曲で詩のイメージにぴったりだったよ！」
「……そうか」

危ない危ない。つい心の声の感想言っちゃったよ。
でもホントに綺麗だったなあ……

「じゃあ次はこつちこつち！」
「あいよ」

そんな感じで時間はすぎていった。
気が付けばもう朝方になっていたが不思議と眠くない。心といるからなのか、自分の詩がこんないい曲になったからなのかわからないけど。

「ちょっと休憩な」

「あつ、ごめんね。心ばかり疲れちゃうよね？」

「それは別にいいんだけど、光に聞きたいことがあつてさ」
「何？」

「お前、なんで暗いイメージの詩しか書かないんだ？明るい曲が浮かんでこないだよな」

「……ごめん」
「別に謝ることじゃねえけど、なんかあんのか？」

瞬のこと思い出してた。

あの時のことがまだ抜けてないせいか、詩を書くときは決まって辛い気持ちをそれに向けてしまう。

「うん。ちよつとね……」
「そっか。オレには言えないことなのか？」「言えなくはないけど

…」

「じゃあ言えよ。楽になるかもしれないだろ？」

「うん…」

僕は瞬のことを話した。

心は僕の話聞いて頷いていた。なんとなく怒ってるような感じにも見えた。

「そんなことがあったのか」

そう言つと心は向こうの部屋に行ってしまった。それだけかよ…

しばらくすると心が何かを持って来た。

「これお前にやるよ」

目の前にあったのはいつも心がつけてた古いシルバーのリングと鍵の形のトップとチェーンだった。

「えっ？なんで…？」

「お前は心が弱いからな。それつけて、少しオレの強さをわけてやる」

思いもしない心の行動に驚いた。

「でもいつもつけてるってことは大事なものなんじゃないの？」

「オレが15の頃からつけてるやつだ。音楽を始めようと思ったきつかけ。そのきつかけをつくってくれた人からもらったもんだ」

「そんな大事なものの貰えないよ！」

「いいんだよ。その代わりいつか明るい詩を書いてこいよな」

気が付くと僕の目からは涙が溢れていた。

心がそんな大事なものを僕にくれたこと。自分の夢のきつかけになったものを人にあげるなんて、簡単にできやしない。

どんな励ましの言葉や慰めよりも嬉しかった。
不器用な心らしかった。

「そんな泣くほどのもんじゃねえから」

「そんなことないよ。ありがとう心…すごい嬉しい。僕頑張るよ！
それとこれ大事にするね」

「ん？ああ…」

照れ隠しをしている心に僕は少し笑った。

「なに笑ってんだよ？」

「ううん。別に（笑）あつ！もう始発動いてる。そろそろ帰ろうかな」

僕はもらったトップとリングをチェーンにおし、身につけた。

「じゃあ帰るね」

「駅まで送るよ」

「いいよ。近いから」

「いいから」

駅に着くとやっぱり人影はない。当たり前か。こんな朝早いし…

切符を買い、改札を通った。振り返ると心はこっちを見ていた。僕が手を振ると、心は周りをキョロキョロして手を少しだけ挙げた。
すごい照れ屋だな…

そんなことを思いながら僕は電車に乗った。

僕と心がそうしてる間に僕の周りで変化が起こり始めていた。一つ
の人影と共に…

暴露

少し寒い朝。

いつもより早い時間に目が覚めた。

窓を開けて空を見る。

よくわからないけど、周りの空気が違う感じがする。

なんだろう？気のせいかな？

いつものように学校に行きバイトに行く。

「ああ、疲れた。なんか今日はすごい疲れたねえ」

「アンタも？私も今日はいつもより疲れたよ。あれっ？光、そんなネックレスしてたっけ？」

「これ？心にもらったんだよ」「すごいじゃん！もしかして付き合ってるのか！？」

「そんなんじゃないよ」

僕はネックレスをもらったきっかけを由樹に話した。

「へえ。なんかすごい人だねえ。でもそんな大事なものの普通あげない？もしかして心君も光のこと好きなんじゃないの？」

「えっ…？それはないでしょ」

「そんなのわかんないじゃん！まだ彼の気持ち聞いたわけじゃないんでしょ？」

「そうだけど…」

確かにそのことも考えた。でもあれからはまた今まで通りの生活に戻ってる。変わったことはあまりない。

「ちよつとその鍵のトップ見せてくれない？」

「いいよ」

僕はチェーンからトップをはずし由樹に渡した。

「よくできてるねえ。最近鍵の形のやつよく見るけど、こんなにデ

ザインが細かくて綺麗なの見たことないよ」

「そうなの？でもそれ15の時つてもらったって言ってたからそんなに新しくないはずなんだけど」

「だからすごいんだよ。そんな10年も前のものだから」

そう言うと、由樹はトップの裏側を見た。

「裏も凝ってるねえこれ。とても古いものとは思えない…あっ…」

その瞬間、由樹の手からトップが落ちた。そして、
パキン！！！！

落ちたトップは上のほうが割れてしまったのだ。

「ああー！ごめんね！ごめんね光！大事なもののなに割れちゃった

…」

僕は動揺隠しきれなかったが、由樹は大事な友達。

トップも大事だけど、今ここで由樹をせめても仕方ない。

「しょうがないよ…もともと古いものだったんだから」

「ごめんね…ごめんね」

由樹は何度も何度も謝っていた。

そのうち二人とも何もしやべらなくなってきたが、由樹が突然思いついたように沈黙を破った。

「あっ！！！！そうだ！私の知り合いにシルバーのアクセをつくってる人がいたんだ！その人に頼めばもしかして直してもらえるかも！」

「ホント！？」

「まだわからないけど頼んでみる価値はあると思う！」

「じゃあ頼んでみてくれない？」

「じゃあこれ少しの間預かっていい？」

「うん。よろしく頼むよ」

「ごめんね光…」

「もう謝らなくていいってば」

家に帰り、部屋にはいると僕はベッドに横になり心になんて言おう
って考えた。きつと怒るだろうなあ。。
そんなこと考えてるうちにいつのまにか眠りに落ちた。

三日くらい経って、部屋でテレビを見ているとケータイが鳴る。こ
れは着信だな。ケータイを手に取り、開くと【田中由樹】の文字。
もしかして直ったのかな？少し期待しながら電話にでる。

「もしもし。どしたの？」

「あつ！心？トップ直ったよ！」

「ホントに！？」

「うん！！明日はバイトないから明後日渡すね！」

「うん。ありがとう由樹！」

「ううん。元はといえば私が壊したんだからさ」

「それはもういいって。でもよくこんな短い時間で直ったね」

「直してくれた知り合いがね、これならすぐ直るからって言うてく
れたの。」

「そつかあ。よかった。明後日何時からあ？」

「１０時からだよ」

「オレ１０時までだからちょうど入れ違いだな。でも大丈夫か」

「渡す時間くらいあるから平気だよ」

その日はちょうど心と会う日。間に合ってよかったあ！

「じゃあ明後日持っていくね！」

「うん！じゃあね」

電話をきり安心したせいかそのまま眠りについた。

二日後。。

いつもの時間に起き、リビングに行きテーブルにつく。

「おはよう」

「…光？アンタ、私たちに何か隠してない？」

いきなりの母親の言葉。

「えっ？なにが？」

「なにがじゃなくて、隠してることはないかって聞いているの」

「何朝から？何にも隠してないよ」

「ウソおっしやい！昨日アンタの昔の恋人とか言う人がうちを尋ねてきて、しかも男で…」

……………えっ？

突然の事で僕は何がなんだかわからなくなった。誰だ？

考えても浮かんでくるのは一人しかいない。

……………

「瞬」

「そんなのウソに決まってるじゃん。よくそんなの信じられるね」

「そりゃウソだって思いたいわよ！でもあんな写真見せられたら…」

「あんな写真？？」

「昨日きた人とアンタが…キスしてる写真よ！」

「そんな…」

確かに一度キスをしてそれを二人で写真にとったことはある。

まだ残ってたなんて…

「もう私なんていいかわからなかったわよ…」

「なんで昨日そいつが来たとき起こしてくれなかったの！？」

「私も混乱してたのよ！その時起こしても何話していいかわからなくて…」

「……………ごめん、母さん」

「…じゃあやつぱりホントなのね？ああ、私の育て方が間違ってた

のかしら…」

「違うよ！母さんのせいじゃないよ！」

「私が…私が…」

ばたっ！！

母親はそのまま倒れた。

「母さん…母さん！！」

僕は救急車を呼び、父親に連絡をとり、病院へ向かった。「なんでこんなことに…？」

僕は父親に説明をした。

自分が同性愛者であること。昨日の夜なにかあったかを…

「それはホントか…？」

「うん…」

「…とりあえずお前は学校に行きなさい」

「こんな時に学校なんか行けないよ！僕もここにいる！」

「わからないのか！？母さんはお前のせいで倒れたんだぞ！そんな時にお前が傍にいても仕方ないだろうが！私から何とか説得するか、お前は学校に行きなさい」

「説得って…？なんて言うの？」

「一時的な発作みたいなものだから、心配いらなくても言うから」

………発作？？

「うん…わかった。今日はバイトだから、夕飯いらない。そのあと友達と遊びにいつてくるから、夜遅くなるね」

「ああ、わかった」

僕は病院をでて家に帰り、学校に向かった。

……発作？僕は…病気なの？僕はここにいてだけで家族に迷惑をかけてるの？

僕は生きてるだけで母さんを倒れさせてしまうほど、ショックを受けさせたの？……僕は、僕は家族を壊してしまった。

ただ、同性を好きってだけで…

その瞬間、なんだか生まれてきた意味がないと感じてしまったんだ…足取りは重く、何もかも無気力になったが、なんとか学校に着いた。

もう昼を過ぎていて、とりあえず友達と話して気を紛らわせようと思ひ、大学中を歩き回る。

すると、僕が歩く度に周りからヒソヒソと話し声が聞こえる。

………まさかね。

やっと友達数人が話してるを見つけ、話し掛ける。

「うーっす！」

友達はこちらを見ると、無視をして会話を続ける。

「ちよつと、シカトすんなよ！」

肩をさわった瞬間、ビクツとしてこちらを見た。

「触んなよ！ホモがうつるだろ！」

………えっ？ウソだ…

ここでも瞬が…？

「なんで…？」

「なんでって大学中で噂だよ。写真が掲示板に貼ってあったんだから」

僕は走りだした。

もうみんな知ってる？

僕のことを？

ありえないよ…

どうして??

もう嫌だ！！何も考えたくない！

家に帰り、部屋に入る。

ベッドに潜り、僕は泣き続けた。

どうして？男を好きになったらいけないの？

なんで？なんで…？

ただ時間だけが過ぎていった。

気が付くとバイトの時間。そうだ。由樹…由樹ならわかってくれる。
重い足をひきづってバイト先へ向かった。

「おはようございます」

「あつ、来たよ」

「あいつがまさかなあ…」

また聞こえてくる話し声。

まさかここでも？

すると上司がこっちにきた。

「お前、ゲイなんだって？」

「えっ？」

「昨日変な男がきて、お前とその男がキスしてる写真を持ってきたんだ。別にそれはどうでもいいんだが、他のやつらに迷惑かけないようにしろよ」

………迷惑？僕が男を好きになるのにみんなに迷惑がかかるの？

「…はい、わかりました」

もう訳がわからなくなってきた。さっき泣いたせいか、もう涙もない。

早く由樹に会いたい…

10時になり、上がりの時間。

「お疲れ様でした」

「お疲れさんでした」

周りからはクスクスと笑い声が聞こえる。

そんな中、由樹がはいってきた。

「由樹い…」

「おはよう、光」

「みんな僕が同性愛者だってこと知ってるんだ。瞬がそこらへん回って、僕の知ってる人に言ってるみたいなんだよ」

「ふうん、そう」

「ふうん…って由樹？どうしたの？」

「別に。私これからバイトだから、じゃあね。お疲れさま」

「由樹…？どうしちゃったの？あつ、そうだ！トップは！？もってきてくれた？」

「トップ？そんなの知らない。忙しいから話し掛けないで」

そんな…

由樹まで…？

もう嫌だ…

どうして僕がこんな目にあわなきゃいけないの？

ただ男を好きってだけで…

もう…疲れた。

生きてる意味なんてあるの？

友達に裏切られて、家族を壊してしまい、知らない人からは笑われる。

……心。

そうだ。まだ心がある。

僕は急いで待ち合わせの駅へ向かった。
何も考えられない。

ただ今は心に会いたいって思ったんだ。

駅に着くと、雨が降りだしてた。

心はまだ来てない。

遅れてるのかな？

その時、メールがはいってきた。心からだった。

「ごめん。少し遅れる」

なんでこんな時に限って…

僕はその場に座り込み、顔を伏せた。

どれくらい時間がたったかわからない。
その時、誰かが頭をぽんぽんと叩いた。

僕は顔をあげて上を見た。

すると、立っていたのは心じゃなかった。

そう…今回僕のことをあちこちで言ってまわった瞬の姿がそこにあった。

雨の中で

「…瞬」

「よお！光！どうした？うずくまって？」

何事もなかったかのように振る舞う瞬。

「どうしたじゃないよ！なんで僕のことわざわざ言ってまわったの！？写真まで使って！」

「ああ…どうだった？みんなの反応は？」

「どうもこうもないよ！お前のせいで……！お前のせいで僕は全部失くしちゃったんだぞ！友達も親も！」

僕は気が付くと瞬に殴りかかっていた。

でもケンカのひとつもしたことない僕のパンチが瞬に当たる訳がない。

簡単によけられ、そのまま反動で顔から転んだ。

「ははっ！いい様だなあ！」

「くそあ！」

僕は何度も何度も瞬に殴りかかった。

そのたびに雨で濡れた地面に滑り込み、ずぶ濡れになる。

「なあ、光？他のやつらなんて、薄情なもんだろ？ただ男が男を好きってだけで今までのことなんか忘れてああやって振る舞うんだ。おかしい話だよなあ？確かに周りからすりゃうちらが変なのかもしれないが、それであの仕打ちはなあ……」

「瞬が僕のこと言わなきゃ、僕はあの生活を続けられたんだ。それ

なのに……」

「じゃあお前はそうやって周りに平気でウソついてこれからも生きていくつもりだったのか？」

「えっ……？」

「自分は女が好きですってウソつき続ける気だったのか？」

「だってそうしないと周りのみんなはそうやって生きてるんだもん……それが普通なんだもん！」

「普通？普通ってなんだよ！？男が女のこと好きにならなきゃいけないのか？じゃあそうじゃないオレは普通じゃないのか？」

「わからないよ……。でもウソをついてないと生きられないのは確かなんだよー！」

「はっ、確かにそうかもな。ただの同性愛者ってだけで白い目で見ることからな。他の奴らは。中でも、お前のバイト先の女がひどかったなあ……。お前の話したらすごい軽蔑の目してたぞ」

由樹……ずっと今まで僕を支えてくれてたのにどうして？

「なんで……？なんでこんなことしたの？」

「こんなことって？」

「僕のことみんなにばらしたことだよ！」

「ああ……こうやってやればお前がオレのところに戻ってくると思ったからさ。こうすれば、お前のことわかってやれるのはオレしかないんだろ？」

「それってまだ僕のこと好きってこと……？」

「好き……？お前が戻ってくれば、ビデオで売り専でもしてオレの借金返してくれるだろ？」

「……！……それだけ？それだけのために……？」

「当たり前だろ？お前みたいなめんどくさいやつ、もうこりこりだ

けどよ。まだ若いし、顔もなかなか可愛いから売れるわけよ」

僕は一体誰に必要とされてるんだろう？

いや、もう誰も僕のことを必要としていない。されているのは、顔と体、それだけだ。

疲れた…もう疲れたよ。

その時、瞬の後ろのほうから声が聞こえた。

「最低のクソ野郎だな」

その声と共に瞬は倒れた。

「心……」

瞬はゆっくりと起き上がり心のこと睨み付けた。

「お前か？この前の朝方、駅で光と一緒にいたやつだな？」

「だからなんだ？」

「お前はこいつの、光のなんなんだ？」

「心は友達だよ！」

瞬はその言葉を聞く暇もなく、心に殴りかかった。

心はそれをさらりとかわし僕の方にきて、頭をポンポンと叩いた。

「ちよつと待ってる」

「てめえ！よけんじゃねえ！」

「よけんじゃねえ？知るかバカ。お前、瞬だな？」

「だからどうした？」

「前に光にひどいことしといて、また自分のためにコイツを傷つけ

「たんだな？」

「だから、どうした！？コイツは他の奴らから見放されたかわいそうなやつなんだよ！だからオレが代わりに面倒みてやるっていったんじゃねえか！？感謝してほしいねえ！」

「面倒をみる？ビデオにださせたり、売り専をさせることか？」

「ああ！そうだよ！もうコイツはそれしか生きる道がねえんだからな！」

「このカスが！」

心が瞬に蹴りをいれる。

いや、蹴りというとケンカっぽい感じがするが、そんな感じではなく何か格闘技をやっているのだろうか？綺麗に瞬の頭まで足があたり瞬を薙ぎ倒す。

「何しやがるんだ！？てめえは光のなんなんだ！？ダチじゃねえのか？！だったら口出しするんじゃないやねえ！」

「ダチじゃねえよ。光はオレの男だ。コイツに手えだすんじゃないやねえ」

……………えっ？何？今の？

「お前はコイツがどんなやつか知ってるのか？！とんでもねえめんどくさいやつなんだぞ？」

「ああ？知らねえな？今日から付き合いだしたからよ」

「……………はっ、ははははっ！バカなやつだ！だったら直にわかるだろうよ！一体どれだけめんどくさいかが！ぐわっ！！」

瞬の頭に心のかかと落としが炸裂する。

瞬はそのまま地面に倒れこんだ。まだ意識はあるようでこつちを睨みつけていた。

「てめえは一年も光と付き合ってきたんだろ？それなのに、コイツの良さがわからねえなんてホントバカなやつだ。光はオレの男だ！次にコイツに手出したら、今度はお前は……殺す」

そのまま瞬は意識を失った。

心が僕の方へ歩いてきた。バッグからタオルを出し、顔をふいてくれる。

さっきの言葉はホントなんだろうか？心も僕のことを好きでいてくれたんだろうか？

「なんでこんなことになったんだ？」

僕は心に今日一日あったことを半べそをかきながら話した。

母親が倒れたこと。父親に言われた言葉。

大学でのこと。

バイト先の由樹の話も…

「そうか…しんどかったろ？」

「…うん。ねえ、心？さっき言ってたことホント？」

「あん？」

「僕のこと【オレの男だ】って…」

「ああ。だめだったか？オレはお前のこと好きなんだけどな…」

僕は下を向き、涙を流した。雨のせいで涙も一緒に地面に流れてしまったが、今まで流した涙の中で、一番の嬉し涙だった。

「うつん…。僕も心が好き。ずっと前から心が好きだったよ」

すると心は、僕を優しく抱き締めてくれた。
そして小さな声で言ってくれた。

「家族や友達を失うのは辛いよな？でもこれからはオレだけは光の傍にずっといるから。オレがお前を守ってやるから」

その声は雨のせいで聞き取りづらく、ホントに聞き逃してしまいそうな言葉だった。
照れ屋の心らしい小さな小さな声だったけど、僕の胸に刻み込むように響いたんだ…

それからしばらく抱き合う僕ら。
ずっと目をつむってた。
雨なんか関係ないみたいだった。

しばらくすると心が、
「風邪ひくから帰ろうか？今日はうちに泊まっていけ」
「うん」

そうすると、心は後ろを向き
「ほら」

「何？」

「おぶってやるから」

「一人で歩けるから大丈夫だよ」

「いいから」

またいつものぶつきらぼうに戻っちゃった。
今度はいつあんなこと言ってくれるのかな？
そんなことを思いながら心に甘えた。
あったかくて広い背中。

やっぱり独りでなんか生きられないよね…

そして家に向かって歩きだした。

気絶した瞬の横を通るとき、僕は瞬をみた。

瞬も何かあったのかな？

【普通ってなんだ？】

その言葉が頭に残る。

きつと一生かかっても答えなんかでないだろうな。

そのとき瞬のベルトのあたりで、キラッと光るものを見つけた。

…えっ？何で瞬がこれを持ってるの？

それは由樹が壊したはずの鍵型のトップ。

「ちょっと待って！」

「どうしたんだよ？」

「おろしてくんない？」

僕は瞬に近寄りベルトのところについているトップをとった。

やっぱりそうだ。でもなんで瞬がこれを？

「そりゃオレがあげたやつじゃねえか？なんでそいつが持ってたんだ？」

僕は正直に話した。

壊れてしまったこと。由樹の知り合いに直してもらい今日返してもらうはずだったことも…

「ふーん」

「ごめんね…大事にするって言うておいて…」

「いや、それはしょうがねえよ。……なるほどな。もしかしたら…」

「何かなるほどなの？」

「いや、何でもない。とりあえず帰るぞ。さすがに寒くなってきた」

「?????」

なんだかよくわからないけど、僕はまた心におぶられ家路につく。

心の家に着き、お互いシャワーを浴び、遅い夕食を食べた。

二人とも疲れていたせいか、食べながら寝そうな感じだった。

「もう眠いだろ？オレのベッド使っていいからもう寝ろ」

「心はどこで寝るの？」

「オレは床にでも寝るよ」

「……一緒に寝ようよ」

「……いいのか？」

「だって僕ら付き合ってるんでしょ？」

「まあそうだけど…」

二人でベッドに入った。

少し狭かったけど全然気にならなかった。

「くつついて寝てもいい？」

「ああ」

「明日からどうしよう」

「明日のことは明日考えろ。今はとにかく寝て体を休めるんだ。色々あつて疲れてるんだからな」

「うん」

僕は明日の不安に押しつぶされそうになっていた。
でも隣に心がある。

好きな人が隣にいただけでこんなにも安心できるんだ。
僕は心の温もりを感じながら、眠りについた。

真意

次の日、カーテンの間から差し込む朝日で僕は目を覚ました。隣ではまだ心が寝ている。なんだか昨日のことが夢のことだったように穏やかな気持ちだった。

しばらくベッドの上で心の寝顔を眺めていると、心も目を覚ました。

「おはよお」

「…おはよ」

なんとも無愛想というか、不機嫌というかそんな感じだった。寝起きが悪いみたい…

一時間くらいすると、やっと心が動き始めた。カーテンを開け、ボーっと空を眺めていた。

「お前これからどうするんだ？家に戻るか？」

「……………」

「オレはお前がここにいても全然構わないぞ」

「……今は」

「ん？」

「今はあの家に僕の居場所はないんだ…」

「だったらここにいりゃあいい」

「うん。ありがと心…」

「ああ」

また照れてるみたい。

そつゆう時は決まって目をそらして返事をする。

「それとな…昨日見つけたトップ、お前の友達…名前なんだっけ？」
「由樹のこと？」

「そうそう。その子に見せてみな」

「なんで？」

「見せればわかるよ」

「??…うん、わかった」

「オレは夜から仕事だから、その間一人になるけど…」

「うん。平気だよ」

「うちにあるものは好きに使っていいから」

あるものってホントに必要な最低限なものしかないけど…

「じゃあとりあえずご飯でもつくるよ。嫌いなものとかないよね？」
「ある」

「えっ？あつたっけ??居酒屋で食べてた時はなんもなさそうだったけど…」

「コンビニーフ食べねえ」

そんなもん朝からださないよ…

っーか僕も嫌いだし。

「わかった。じゃあ適当になんかつくるね」

僕は朝食を食べ、しばらくテレビを見ていた。

お昼ごろになると心はギターを手に取り作曲を始める。僕はそれを横でずっと眺めてた。

いろんな表情する心。

何時間みても飽きなかった。

やがて心のバイトの時間になり用意を始める。

「じゃあいつてくるから。お前由樹って子に会いにいつてこいよ」

「えっ?……うん」

正直気が重かった。また冷たくあしらわれるかもしれないと思うと行く気になてなれなかったけど、心の言葉が引つ掛かっていた。

「でも僕も出ていったらこの部屋、鍵かけられないよ?」

「これお前にやるよ」

差し出されたのはこの部屋の鍵。

「これどうしたの?」

「実は昨日、少し遅れたのはこれ作ってもらってたから。オレはもうひとつあるから」

「合鍵?でもどうして?」

「光に持ってて欲しかったからな」

「…ありがとう心。でも付き合うかわからないのに鍵つくるなんて気が早いね!（笑）」

「うるせえな!（照）じゃあいつてくる」

「うん!いつてらっしゃい!」

僕はケータイを手に取りメールを由樹宛てに打ち始める。

【話があるんだけど、今から会えない?】

10分後…

由樹からメールが返ってきた。

【いいよ。じゃあ今から30分後に駅前で待ってるから】

僕は用意をし心の家を出た。

駅前に着くともう由樹は待っていて、何やらそわそわしている。

「由樹、ごめんな遅くに…」

「うん。話って何？」

僕は服の中に隠れてたネックレスを見せた。正確には鍵型のトップを由樹に見せる。

「光！？それ…？」

「なんか知らないけど瞬が持ってたんだ…」

僕は昨日のことを由樹に説明した。

すると由樹は突然座り込み、人目も気にせず大声で泣きだしたんだ。ごめんなさい、ごめんなさい…とただそればかりを言うだけで、僕は何のことかさっぱりだったが、とにかく由樹をなだめた。

「落ち着いた？」

「うん…。ごめんね光」

すると由樹は昨日の出来事を話してくれた。

「ああ！どうしようトップ忘れて取りに家にもどったら遅刻しちゃいそうだよ！なんか雨降りそうだし…きゃあ！」

その時、突然瞬が現れたらしい。自転車に乗っていた由樹は急ブレーキをかけ、瞬の目の前で止まった。

「お前、柊 光って知ってるだろ？」

「はい…。あの、どちら様ですか？」

「オレか？オレは光の元彼」

その時、由樹はなんとなく嫌な予感がしたらしい。

その場をすぐ立ち去ろうとした。

すると瞬は由樹の肩を掴み、自転車ごと由樹を倒した。

「何するんですか！？人呼びますよ！！」

「大丈夫だ。ここは滅多に人が通らないことは調べてある」

由樹の話によると、いつもここを通ってバイトにきてるらしい。人がいなくて暗い道だが、かなりの近道になるそうだ。

「それからお前がもともと光のこと同性愛者だって知ってることもな？」

「だったらなんなんですか？！」

「なあに。ちよつとばかし光に冷たくして欲しただけだよ。さっき、光のバイト先にいって、全部ぶちまけてきたやつたところだから、味方がいるとつまんねえだよ！」

「なっ！！アンタどうかしてんじゃないの！！光にとってそれがどうゆうことかわかってんの！？」

「ああ、アイツはそれで独りになる。それでオレのところに帰ってく

るんだ」

「アンタ…おかしい！腐ってるわよ！」

「何とでも言え。……ん？何だこれ？」

「あっ！それは！」

倒れたときに由樹のバッグからトップが飛び出して地面に転がっていた。

「ちょっと返さないよ！」

「ほう、よっぽど大事なものらしいな？返して欲しけりや言うことききな！」

「それで結局、バイトがおわった後、またここにこいって言われて……。そんなことしなきゃよかったけど、あれ壊されたら……。せっかく光が心君からもらった大事なもののなのにつて……」

由樹……

僕はバカだ。こんなにも僕のこと考えてる由樹を裏切ったなんて思ったりして……

「もういいよ由樹。由樹が無事でよかったよ。それに由樹が裏切ったって思った僕も悪いし……」

「違うよ！光は全然悪くないよ！私がつと強ければ！あんなやつ殴ってやったのに！」

「由樹……」

「ごめんね、光……」

そのまま二人は人目も気にせずその場で泣きだした。僕はもう絶対

に由樹のことを疑ったりはしないと誓ったんだ。

「でもよく私に会う気になってくれたね？」

「うん…最初は気が重かったんだけど、心が会いにいってこれ見せろって。それに僕も瞬がなんでこれ持ってたのか気になったから」

「それってもしかして、心君はわかってたんじゃないの？」

「どうゆうこと？」

「きつと光の話とその状況を見てすぐわかったんだよ。じゃなかったら私に会いにいけないって言わないよ！」

「それは帰って心に聞いてみるよ。とりあえず飲みにはいかない？心帰ってくるの遅いし。仲直りの証に！」

「いいねえ！よおし！ぱーっというくう！？」

「よっしゃあ！いくぞお！」

僕と由樹は居酒屋へ行き、大騒ぎをした。

たぶん店の中で一番うるさかったのに違いない。

今までのことを吹き飛ばすかのように。

由樹と別れ、心の家に帰った。

まだ帰ってこないか…

うつらうつらしてたらドアの音がした。

「おかえり」

「ただいま。まだ起きてたのか？寝てりゃよかったのに」

「うん。聞きたいことがあって」

「どした？」

「由樹にこのトップを見せろって言ったじゃん？心はもしかしてわかってたの？これを見せれば僕らが仲直りできるって」

「ああ、なんとなく。そしたら由樹って子が光に冷たくした理由

も、アイツがそれを持つてた理由も説明がつくからな。まあ憶測だったけど」

「…………心、すごいねえ」

「そうか？」

「僕そんなこと思いつかなかったもの！」

「まあ、光は気が動転してたからな」

「でもすごいよ！」

「あ、ああ」

心はまた目をそらして照れ臭そうにした。

僕のこと何気なく気にかけてくれて、いざというときは助けてくれる。

そんな心に僕はさらにひかれていったんだ。

「それよりオレも話があるんだ」

「何？」

「オレと一緒に歌やらないか？」

突然の心の言葉に僕は驚いた。

決心

「歌…？」

「ああ」

「いきなりそんな…」

「すぐ返事を期待してるわけじゃない。ただお前の書いた詩とオレが曲をつけたやつあっただろ？あれをメンバーに聞かせたら、かなり好評だな」

「そうなの？」

「ああ、だから作詞とマネージャーみたいな感じでオレらのバンドにはいつてくれないかなって思ってたさ」

予想もしなかった突然の誘い。

僕がバンドの為に作詞？

「考えといてくれよ。オレは寝るから」

「僕もとりあえず今日は寝るよ」

ベッドの中で色々考えていた。学校のこともある。家のこともある。

僕にそんな大役が務まるのかな？そんなことを考えつつ目をつむった。

それから何日か経ち、心のバンドのメンバーと顔をあわせることになった。

バンド名は【WELL】

別に深い意味はなく、メンバーの一人が響きがいいからとなんとなく決めたらしい。

メンバーは心をいれて、4人。ギター兼ボーカルの心、その他に、もう一人のギター、ベース、ドラムだ。

その日の練習を終え、みんなで話をする。

聞けばみんな大学中退やら、高校行つてないとかそんな感じだった。心も高校を卒業して、なんだかんだでこのバンドにはいつたらしい。

みんな色々あるんだあつて思った。

でも確かなことはホントに音楽が好きなこと。

それだけはすごく伝わってきたんだ。

僕はそれを見て、いろんな意味で決心を固めた。

次の日、僕は家に足を運んだ。

全然連絡をいれてなかったから怒られるかもしれない。

それでも構わなかった。

ドアを開け、リビングに行くと両親ともテーブルについて食事をしていた。

「光…」

父親がまっさきに僕の姿に気が付く。

「光！どこにいったの？連絡もしないで！心配したのよ？」

僕はこの時、凄まじいほどの疎外感を感じた。

以前とは僕を見る目がまるで違う。

なんていうか、よそよそしいようなそんな感じがした。

ああ、もう昔みたいに笑ったりとかできないんだ。

戻ることなんてできないんだ。

そう思った瞬間だった。

だからといって、子供を心配しない親がいるはずがない。
でもここで僕が親元に帰ると、またいつどこで崩れるかわからない。
。

もうここには帰れない。

僕は決心したことを行動にうつす。

「心配???ケータイに着信もメールもいれないで?」

これは事実。

たぶん親もいきなりのこととで混乱し、僕と何を話していいかわからなかったと思う。

「いや、それは…」

「僕、家でるね。大学もやめるから。手続きとかもあるから、ちよくちよくは顔だすけど、そのつもりでいて」

僕はそれだけ言うと玄関へ向かった。

「ちょっと待ちなさい光!!あの時は私たちも気が動転して…」

「もう決めたことだから」

そして家を出た。

これが今僕にできる唯一の親孝行だ。

この家にいるとまた家族を壊しかねない…

僕は…いないほうがいいんだ。

心の部屋に戻り、これからのことを考えた。

バイト変えなきゃダメかなあ…

あのことがあってから、みんなの視線は痛いくらい僕に集中してる。やりにくさは日に日に増してる感じた。

とりあえず由樹に言わなきゃ。

僕はメールを送り、会う約束をした。

「ホントにやめちゃうの？」

「うん。やっぱりやりにくいことは確かだし」

「私はやめてほしくないけど、でも光が決めたことならしょうがないよね……」

「そんな顔しないでよ。会えなくなるわけじゃないんだからさ！」

「うん……。そうだよな！」

「とりあえず新しいバイトさがさなきゃな……」

由樹と別れ、部屋に戻ると心が帰ってきてた。

「おかえり。どこ行ってたんだ？」

心に今までのことを話した。

「そっか。ずいぶん思い切ったことしたもんだな」

「うん。自分でも驚いてる。でも後悔はしてない」

「それならいい。まあ住む場所はここで問題ないけど、バイト先は自分で見つけろよな」

「うん。わかつてる」

「じゃあ気晴らしにカラオケでもいくか?!」

「カラオケかぁ…久しぶりだなぁ! いくう!」

「よし!」

駅前のカラオケボックス。久しぶりだから何歌おうか迷っちゃうなあ。

「先いれるぞ」

「うん」

相変わらずうまいなあ。

なんていうか安らぐ歌声って感じだなあ。。

「次、光だぞ」

「う、うん」

うまい人のあとに歌うのってきんちょうするんだよね…

ああ、恥ずかしい!

いきなり音はずした!

この歌好きなのに!

でもだんだん調子できたあ!

とかやってるうちに終わっちゃった。。

あれっ? 次の曲が入ってない…

やばい…あんまり下手すぎてショックうけたとか!?

恐る恐る心の方を見ると、なんともすごい顔で僕を見ていた。
ああ！やつぱ下手すぎてびっくりしてんだ！

「心…ごめんね。下手すぎて言葉もないよね…？」

するといきなり心は僕に抱きついてきた！

「えっ！！何なに？！」

「何が下手だよ！！逆だよ逆！お前つまりすぎだよ！オレの周りでもこんなにうまいやついないよ！」

「またまたあ…うそでしょ？」

「いやマジで！！…これならいけるかもな…」

「えっ？なんか言った？」

「ううん！次これ歌ってよ！」

「う、うん」

そんな調子で心のバイトの時間まで二人で歌いまくった。
僕そんなにうまかったかなあ…？
悪い気はしないけど！

でもまだ二人とも知らなかったんだ。
このことがきっかけで起きる事を…

4人

「光、今日の夜空いてるか？」

「うん。特に予定はないけど？」

「今日友達と会う約束してるんだ。そいつはオレが唯一親友って呼べるやつでさ、オレのこと知ってるんだ。だから光のこと紹介ってゆうか会ってもらいたくてさ」

心の親友かあ…

やっぱり心と同じでぶっきらぼうなのかな？（笑）
話合わなさそう。。

でも会ってほしいってのは嬉しいな。。

「うん、じゃあいくよ！そしたら由樹も呼んでいい？心、まだ会ったことないよね？」

「ああ、そういやそうだな。ちょうどいい機会だから呼びなよ」

「うん！じゃあメールするね」

「アイツおっせえなあ…」

「そうだねえ…」

「でも遅くなるって言ってたんじゃないんですか？」

「まあそうなんだけどな」

僕ら3人がいるのはいつもの居酒屋。

心の親友は仕事の都合で少し遅れるらしい。

「とりあえず飲むか」

「そうだね」

「じゃあカンパーイ!!」

そんなこんなで2時間が経過しようとしていた。

心の親友は仕事が忙しいせいか、来る気配すらない。

「そついえば二人って付き合ってるんでしょ?」

「そうだよ。何改まって?」

「いや、なんかそんな風に見えないからさあ」

「オレちよっとトイレいつてくる」

心は席を立つ。

なんだか不機嫌そうに見えたけど…

「やばい。私、なんか悪いこと言っちゃったかな？」

「大丈夫だよ。心あんまり怒らないから。結構大人だし」

「私とあんまり歳変わらないのに落ち着いてるよねえ」

「そういえば由樹っていくつだっけ？」

「女性に歳を聞くんなんて失礼な男ね！聞かれて答えるほど安くないよ」

「じゃあ今度ビールおごるからさあ」

「今年で24になるわ」

言つの早っ！っーか安っ！ビールで答えられちゃう由樹の歳の価値って…

「そういえばアンタらってまだキスとかしてないの？」

僕は食べてた焼き鳥を由樹の方に発射した。

「汚いなあ！もしかしてまだとか??」

「ゴホッゴホッ!!…まだしてないよ…」

「だからだよ！だから二人にはオーラがないんだ！」

「何そのオーラって?」

「ほら、恋人同士が醸し出すオーラって普通あるじゃん?それがな
いから二人は付き合ってるように見えないんだよ」

「そんなんでたばバレちゃうじゃん…」

「あつ、そうだね。にゃはは!」

「にゃははじゃないよ、まったく…」

「そうか!オレらはキスしてないから恋人同士に見えないのか!」

『ええっ!!!!』

心のいきなりの登場と思ってもよらない言葉に僕と由樹は持っている
ビールをこぼしそうになる。一体いつからいたんだ!?

「よし!客もいないことだし、ここで由樹さんに見届けてもらおう
!」

「はあ?何を…?」

「オレらのキスを!」

「ちよっ！ちよつと心、酔っ払いすぎだよ！ねえ、由樹からもなんか言ってよ！…って、あれ？おーい、由樹い？」

心の予想もしない言葉に驚いたのか、由樹は持っていたビールを完全にぶちまけていた。

「すっ！すいませーん！おしぼり！おしぼりくださあい！！」

僕は店員さん呼びつつ、手元にあるベルスターを連打する。

「はっはっは！あいかわらずだなあ！心！」

突然現われたのは体格のいい男。背は僕と同じくらいだ。

「冬司おせえよ！」

「わりいわりい。仕事長引いちまってよ」

「心？この人が？」

「ああ、こいつがオレの親友の春日冬司だ」
かすがとつじ

「ども！よろしくよろしく！んでこのお二人さんは？」

「こっちが柊 光。そんでもってこっちが光の友達の田中由樹さんだ」

「どうも。よろしくお願いします」

「よつ、よろしく願いしましゅ！」

「由樹？なんであいさつで噛んでるの？」

「えっ！？私噛んでた？」

「うん。思いっきり」

「気のせいよ気のせい！ねえ？冬司ちゃん！？」

また噛んでるし…

もしかして由樹ってば冬司さんのこと…

「まあ、とりあえず飲もうよ！！夜はこれからだあ！」

『おお！！！！』

こうして僕ら4人は楽しく飲んだ。

由樹と冬司さんは初対面とは思えないほど、意気投合していた。

そして心と冬司さんを中心に、会話が展開していく。笑い声が絶えない時間だった。

どうやら4人とも相性がいいみたいなんだ。

それがなんだか嬉しかった。

この4人の出逢いは忘れたくても忘れられないものになることをこの時はまだ知らなかったんだ。

なんだかんだで閉店時間になり空は少しずつ明るくなっていった。外にでてそれでも話し足りない僕らは店の前で少しおしゃべりをし

ていた。

「このままだと永遠にしゃべってそうだから帰ろっか!?(笑)」

「そうね。なんだか空も明るいし」

「光、お前歩けるかあ?」

「うん。大丈夫、大丈夫」

とか言いつつ、足元がおぼつかない僕。

「しょうがないなあ。ほら」

心が後ろを向き、しゃがみこむ。

「いいよ、恥ずかしいから…」

「いいから」

「光君、観念しといたほうがいいよ。コイツ頑固だから」

「そうゆつこと。ほら」

僕は心におぶられる。

「由樹ちゃんの家近いのか?」

「駅の反対側のパチンコ屋の近くなんです」

「おっ!うちと近いじゃん?じゃあ送ってくよ」

「えっ！？あつ！一人で帰れます！大丈夫です！」

「うちも近いから送ってくつて感じより、一緒に帰ろうって感じだよ！それともオレと一緒に帰りたくないとか？」

「いえ！全然！！もっと一緒にいたいです！」

由樹の言葉に一同騒然。3人は啞然とした。

「えっ！？私変なこと言った？！」

「い、いや！大丈夫だよ！じゃあ帰ろうか！」

こうして由樹と冬司さんは並んで帰っていった。

僕と心も帰路につく。

家に着くなりベッドに倒れこむ二人。

「ねみい、やべえねみい」

「僕も眠い。かなり眠い」

「なあ、光？」

「なあに？」

「キス…しないか？」

「えっ?! 何いきなり？」

「いや、さっき由樹さんに言われたこと思い出してさ」

「由樹の言うことなんか気にしなくていいのに」

「それもあるけど、オレがしたいんだよ…ダメか？」

「ううん。いいよ」

僕は初めてのキスをした。

心の唇は荒れていて少し痛かったけど、すごく幸せだった…。

プレゼント

【WELL】にはいつてから数か月がたった。

メンバーとも仲良くなり、活動もいい方向に進んでいた。

バンドの方針みたいなもので、リーダーは決めないようにしてるみたい。

でも実質仕切っているのは心だった。

みんなもそれで納得とゆうか、満足そうだった。

「じゃあ今日の練習はここまで」

『うーッス!!お疲れえ!』

みんなでジュースやお菓子を食べながらいろんな話をする。練習も

大事だけど、この時間も僕はすごく好きだったんだ。

高校や大学でのことを思い出していた。

「そっいえばライブの日きまつたんだって?」

メンバーの一人が言う。

「そうだった。今から二週間後にやることになったんだよ」

『おお!』

『久しぶりじゃん!よっしゃ!やったるでえ!』

「ねえ？心ライブって？」

「ああ小さいライブだけど、やらせてもらえることになったんだ」

「すごいねえ！やったじゃん！」

「年にちよくちよくしかないから、みんなその一日一日に懸けてるんだよ。小さいライブだけど業界の人とか見に来てるかもしれないからな」

「そうなんだ。じゃあ頑張らなきゃだね！僕もサポートするよ！」

「ああ。曲数は全部で3曲。最初の2曲はオレらの作った曲で、ラストは光の作詞とオレが作曲したやつでいこうと思う」

「……ええっ！！人に聞いてもらうの！？」

「そうだ。前に言っただろ？なかなか好評だったって？」

「いやそうだけど……」

「それはメンバーに了承済みだ。あとは…光ちよつとこの曲みんなで演奏するから、歌ってみてくれよ」

「はあ！？僕が歌うの！？」

「ああ。この前カラオケでお前の歌聞いたとき、これだっと思ったんだ」

「無理だよ！恥ずかしいし、そんなの！」

「大丈夫だよ。無理そうだったら、曲は変えないけどオレが歌うから。試しにみんなの前で歌ってみなよ」

「うん…わかった。それなら…」

みんなそれぞれ配置につき、準備が整う。

「じゃあいくぞ」

「えっ！ちよつと待って！」

僕は大きく深呼吸をした。

「…うん。いいよ」

演奏が始まった。

この曲は僕が心の家に行ったとき、初めて聞かせてくれた曲だった。覚えててくれたのか分からないけど、これを選んでくれたのがすごく嬉しかった。

そのおかげか、リラックスして歌うことが出来た。

「どうだ？みんな！！」

『う、うん。すげえうまいよ』

『ああ。。心よりうまいかもな』

「だろう！？やっぱ光はうまいんだよ！そこのやつじゃ足元にも及ばない！」

「そうかなあ？」

みんなの言葉を聞いて、なんだか自信がついたような気がした。でもやっぱり恥ずかしい。

その恥ずかしさのせいでメンバーの様子に気付けない僕がいたんだ。この時からすでに亀裂が生じていることを僕はまだ知らなかった…

「じゃあ予定どおりラストは光でいこう！」

「ええっ！？無理だよ！」

「大丈夫だよ。今だって歌えたじゃん！」

「今は人少なかったからだよ…」

「あとはその場の雰囲気でなんとかなるって！はい、決まり！」

こうして半ば強引にラストを歌うことになった。

家に帰り、僕は夕飯の支度をしていた。

心は帰りに何か食っていいこうって言ったけど、あんまりお金がないから家で食べることにした。

「なあ、光？」

「なあに？」

「お前ギターやんないか？」

「えっ？ギター？だってメンバーにできる人いるじゃん」

「いやそれはそれだよ。家にいるとき二人でひけたら楽しいじゃん！」

「まあ確かに……」

「だろ？じゃあ明日オレ休みだから買いにいこう！」

「気が早いなあ」

「善は急げって言うだろ？」

「でも僕あんまり貯金残ってないよ。それにバイトも決まってるし」

「そうなんだ。もうバイトやめて結構経つのに心に甘えてバイトをやらす家事ばかりやってる。」

「オレ給料はいったばっかだし、安いやつだけど買ってやれるからさ」

「もったいないからいいって」

「もったいなくないよ。オレも光ができるようになれば嬉しいしさ！それに光に何か買ってあげたことなかったからプレゼントだと思ってくれればいいから」

「うん…。わかった。じゃあ明日行こう」

「よし！決まり！」

次の日僕らは電車に乗って心がよく行ってる楽器屋に来た。
顔馴染みらしく、その店長とは気が合うらしい。

「ちわーッス！」

「おっ！来たな！くそガキ！」

くそガキ…？

いきなりなんだこの親父は！？

「ギター買いに来たんだよ。くそ親父！」

なるほど。この二人の会話はこれが普通なのか。

「ギターって…お前のギター壊れたのか？」

「違う違う！こいつのだ！」

心は僕の方を見る。

「ほう。そっちの小僧のか」

小僧って…。

この親父は初対面でそれかい！

「小僧、経験は？」

「いえ、初めてです…」

「そうか。じゃあこれなんかどうだ？」

「あつ、はい。ねえ？心？僕わかんないよ」

「そうだよな。いきなりどうだって言われてもわかんねえよな。じゃあオレが選んでやるよ」

「うん。よろしく」

こうしてギターも決まり僕は自分のギターを手に入れた。

心からもらった初めてのプレゼント。

大事に…大事にしなきゃ。

それから歌、歌、歌の日々だった。メンバーとは練習をして、家に帰ると心にギターを教えてもらう。

最初は全然できなかったけど、心は嫌な顔ひとつせず教えてくれた。

なんだかんだで2週間はあつという間に過ぎてしまい、ライブ当日を迎えた。

成功、入口

ライブ当日の朝。

一曲だけとはいえ、人前で歌うことになった僕はあまり眠れなかった。

心はというと回数をこなしているだけあって、かなり落ち着いた様子。

「なんだ緊張してるのか？肩の力抜かないと声でないぞ」

なんとも無理な話だ。

半月前に決められて、はいそうですかって納得できるものじゃない。

二人で少し早めの朝食を食べ、本番前の練習へと向かう。

なんだかピリピリした様子のメンバー。

なんか怖い…。

「ねえ、心？みんなどうしちゃったの？」

「本番前で緊張してるんだろ？」

「そうなのかなあ…」

僕にはそうは見えなかった。ピリピリと同時にギスギスした感じにも見えなかった。

でも本番前の緊張でみんなのことを気にしてる場合じゃなかった。

「じゃあ移動するぞ」

そろそろとメンバーの一人の車に乗り込む。

密閉空間での嫌な雰囲気が少しずつ伝わってきた。

みんな口を一切聞かない。それが僕の緊張をより一層高めていった。

会場に到着。

小さなライブハウスだったがそれでも結構な人数が入るように感じた。

本番直前のステージ。

僕の出番はまだなのに、心臓が口から飛び出るくらい緊張していた。声大丈夫かな？

あーあー、うん。とりあえず平気。

何度も何度も確認しているうちに、幕が開き心たちの出番になる。

歌が始まるとお客さんはなんだか微妙なノリ。

心、歌うまいと思うんだけどなあ…

そんな中、客席後ろのほうにいる変な男が目につく。どこがどう変って聞かれても困るんだけど僕の直感。なんとなく気になっていた。

なんて考えてるうちに僕の出番になる。

「今日は新しいメンバーを紹介します！ボーカルの光です！」

紹介されステージの真ん中にいつのまにか用意されたマイクの方へ

歩いていく。

「新曲の『柊』聴いてください！」

えっ…

それって僕の名字…

僕は心の、メンバーの期待に応えるため一生懸命歌った。

少し悲しい感じのメロディーが歌ってる僕の心にも響いてくる。

人前で歌うのってこんなにも気持ち良かったんだ。

曲が終わり、お客さんみんなが静まりかえる。

うわぁ… やっぱだめじゃん… 拍手がひとつもない。

やっぱり僕なんかじゃ…

そう思った瞬間、客席から津波のような拍手が押し寄せた！

微妙なはずだったお客さんのテンションが一気にMAXに到達した瞬間だった。

客席を見ると、泣してる人も少なくない。

それをみて僕も嬉しくなり心のほうを見る。

心も僕を見て、軽く頷き客席の方を指差す。

すごい歓声だった。

僕は深く、深くお辞儀をした。

幕が落ちライブは最後の最後で盛り上がりを見せた。前にも何組か

やったが僕らのがたぶん一番だったと思う。大成功でライブは終了した！

ステージ裏に行き、僕と心は笑顔で抱き合った。

恋人同士が抱き合う感じじゃなく、音楽をやる『仲間』として。

そんな中、部屋のドアをノックする音。

「ん？誰だ？」

心がドアを開けると、そこに立っていたのはさっきステージ横にいるとき見た変な男。

「ちょっといいですか？」

「はい…どちら様ですか？」

心がそう言つと、男はカバンから名刺を出し心に渡すところ言つた。

「私、【ひだまり】の営業をやっております松田と申します」

メンバー全員が凄まじい勢いで椅子から転げ落ちる。えっ？えっ！？
今なんかおもしろかった？！

僕もこけなきやいけないのかな？！

みんなに遅れること10秒、僕も椅子から転げ落ちる。

「光、何やってんだよ？」

心が僕の方に来てしゃがんだ。

「ねえ、心？今の何がおもしろかったの？みんなと笑いのつぼが違うのやだなあ…」

「お前何言つてんだよ！？」【ひだまり】っていやあ、かなり有名な

音楽プロダクションだぞ！」

「えっ!?!」

「えーつと話を続けてもいいでしょうか…?」

「あつ、はい! すいません! どうぞ続けてください!」

「あなた方、メジャーデビューしませんか?」

『……………』

『ええええええっ!!!』

一同大興奮!!

それはそうだろう。

何年も音楽活動をやってきて、やっと来たチャンスなのだから。

「ホントですか!?!」

「ええ。どうですか?」

「もつ、もちろんお願いします!」

「そうですか! それはよかった。今までも何度かあなた方のステージを見てきたんですけど、今日のは最高でした! ラストのあの曲、

【柊】でしたね。あれが決め手になりました! 作詞作曲はどなたが?」

その瞬間僕と心以外のメンバーは硬直した。

もちろん僕ら二人は嬉しさのあまりその様子に気付かない。

「作詞はさっき歌ってた光が、それに合わせてオレが曲をつけました」

「そうでしたか。あの曲は詩を先に…なんとなくそんな気がしました。変な言い方ですけど詩の一文一文に、何かストーリー的なものを感じました。その詩のイメージにぴったりの曲で…いやあ思い出しただけで切なくなります」

「ありがとうございます！」

「それでは後日また連絡しますので、今日の所はこれで」

「はい！ホントにありがとうございます」

「あつ、それと光さんでしたね？」

「はっ！はい！」

「あなたの歌声はとても素晴らしいです。きっと聴く者すべてをひきつける力を持っていると私は思います」

「あつ、ありがとうございます！」

「それと心さんでしたね？」

「は、はい！」

「あなたの歌声も素晴らしいものです。ただ今までの曲ではあなた

の力は引き出せなかったのかもしれませんが。心がこもってなかったわけではありませんが、自分がこれから何をみんなに伝えていくべきか？自分が一番唄いたい歌は何か？それを見つけたとき、聴いてる者はあなたの歌声にひきつけられると思います。まあ…今日のことで答えは出てるかもしれませんがね…では、私はこれで」

『ありがとうございます！！』

僕と心は声を合わせて言った。

今までになかったライブの盛り上がり、大成功。

そして突然のデビューへの階段の入り口。

さらには僕の歌でみんなが泣いてくれたり、認めてもらったこと。すべてが驚きと歓喜の日だった。

でも…これから起こる崩壊と、苦難の道になることを僕は知る由もなかったんだ…

崩壊、孤独

ライブも無事終わり、会場からでた僕ら。

「よし！じゃあ今日はみんなであーっと飲みに行くか！！」

「おお！！！」

返事したのは僕だけ。

他のメンバーは何とも表現できないような顔をしていた。

「オレはいいよ。なあ？」

「なんか疲れちゃったから今日は帰るわ」

僕と心を残して帰るメンバー達。

何かあったのだろうか…？

「なんだよノリわりいなあ…じゃあオレら二人だけでもいくか！」

「そうだね！」

僕ら二人はいつもの居酒屋で飲みまくった。

喜びが溢れて、とにかくいくらしゃべってもしゃべり足りない。

そんな中、心が一つの提案をしてきた。

「なあ、光？お前もギターやりながら歌えばよくねえ？」

「う、うん。。でもまだ全然ひけないよ？」

「それは練習すればいいことだし！それに今すぐつてのは無理だから当面は歌うだけ。できるようになったらギターもやればいい」

「うん…できるかなあ？」

「大丈夫だよ光なら。それにオレがついてるし！」

『オレがついてる…』

心はどうゆう意味でいったのかはわからないけど、弱気になってる僕を後押ししてくれる言葉だった。

「じゃあ家の練習に加え、みんなで集まるときも練習しなきゃだな！」

「うん！頑張るよ！」

その日、僕と心は幸せの余韻に浸りながら眠りについた。

メンバーで集まる練習の日。

僕は心を買ってもらったギターを持ち、いつも練習するスタジオへ向かった。

他のメンバーの姿はなく、とりあえず僕の練習を心が見てくれていた。

「ここはもつと強く押さえて…そうそう」

「うん」

心は不器用な僕に丁寧に教えてくれた。

「心。ありがとね」

「なんだ急に？」

「うん。心がいてくれたから、今の僕がいるからさ」

「そんなことねえよ。光だって頑張ったんだ。ちゃんと結果はでたじゃん！」

「それも心と出逢わなかったら、こんなに頑張ることも知らないまま生きてたと思う」

心は突然僕を抱き締めた。

「オレこそ礼を言わなきゃだよ。お前がいたからこそまで来れた。お前に出逢わなかったら、オレは…オレは…」

「心…」

僕も心を強く抱き締めた。心の気持ちに応えるように…

「光…ここでキスしてもいいか？」

「えっ！？ここで！？」

「今誰もいないし、いいだろ？」

「うん…いいよ」

僕らはそつとキスをした。

ガチャガチャ！！

扉のノブが回る音に反応し、僕らは即座に離れた。

残りのメンバーがみんな揃って現れた。

「よお！遅かったな」

「はあ？時間通りだよ」

時計を見ると確かにそうだった。

無言のままそれぞれスタンバイを始める。
嫌な空気が漂っているのがわかる。

「あつ！そうだ。光にもギター教えてるからできるようになったらこいつも使うから、そのつもりでな！」

みんなの手が止まる。

「ああ、そうだよなあ。光のおかげでオレらデビューできるんだもんな」

「そうそう。お前がいなくてもオレらの力でなんとかなったのに、

横からしゃしゃりでてきやがって…」

…！！

「おい！なんだその言い方は！！」

心が立ち上がり激怒する。

「お前がこんなやつ連れてくるからよ…」

「あぁっ！！？」

心はメンバーに近寄り、凄まじい勢いで睨み付ける。

「てめえらマジで言ってるのか！？おまえらの演奏があるから、こいつが歌えるんじゃないか！！」

「じゃあオレらはこいつのためにやってんのかよ！だったら他のやつ探せよ！オレらはオレらのためにやってんだからよ！！」

「んだと！こらぁ！！」

殴りかかりそんな心を僕は必死で止めた。

瞬とケンカしたときも心は相手に触らせずに勝ったくらいだ。下手したら仲間同士で乱闘が起きるに違いはない。

いや、もうその一歩手前まで来ていた。

僕はある決断をする。。

「心！やめてよ！僕がいなくなれば済むことなんだから！」

「そんなことねえよ！」

「そんなことあるんだよ……！」

僕の声の大きさに驚いたのか、全員が僕を見た。

「みなさん、皆さんご迷惑かけてホントにすいませんでした。僕やめますから……いなくなりますからケンカしないで仲良くやってください」

そして僕は深く一礼をし、スタジオを後にした。

外にでて、しばらく歩くと知らないうちに涙がこぼれてきた。

まただ……

また大事な人の生活を壊してしまった。

僕がいると誰かに迷惑がかかる……

もう心の傍にもいられない。

心……ごめんね……ホントにごめん……

涙を拭き走りだそうとした時、後ろから心の声がした。

「心……」

「ハア、ハア、光……お前が……やめる必要ねえよ！」

「だけど僕は！心の大事な居場所を壊したんだ！好きな人の居場所を壊したんだよ！もうあそこへは戻れないよ…」

「…だつたらオレもあそこへは戻らない！」

「はあ！？何言つてんの？！歌はどうするの？！これからって時なんだよ！そんなこと簡単に言わないでよ！！」

「オレの居る場所は…オレの居場所はお前なんだよ！お前の傍なんだよ！！」

心は僕を強く抱き締めた。

人が周りにいるにも関わらず涙を流す僕を…

「だから壊したなんて言うな！光は何も壊してない！壊してないんだから…」

僕らは人目を気にせず抱き合った。

周りからはザワザワと話し声が聞こえてきたが、そんなの関係なかった。

まるで二人だけの世界に入ったようだった。

どれくらいこの状態でいたんだろう？

心が離れ、こう言った。

「これからのことは、また考えればいい。とにかく今は家に帰ってろ」

「心は…？」

「オレは戻って光のギター取ってくるから、家で待ってる。いいな？」

「うん」

あまりの出来事に大事なギター置いてきちゃった。
心はそのまま振り返り、スタジオへ向かって走っていった。

僕は一足先に家に帰り、心の帰りを待っていた。

しかし、一時間経っても二時間経っても帰ってこない。
僕は心のケータイに電話した。

トウルルルル…ガチャ！
ツー、ツー。

切れた。
どうしたの心？

僕はいてもたってもいられなくなり、スタジオへ向かった。

スタジオの入口にいくと、演奏が聞こえてくる。
メンバーはまだ練習してるみたいだ。

僕は深呼吸をし、ドアを開けた。

みんな一斉に僕を凝視し、演奏を中断する。

「なんだ？まだ何か用か？」

「心がここに忘れ物とりにきて、まだ家に戻ってないんです…。すぐ帰るって言ったのに…」

するとメンバーみんなが互いに顔を合わせ、大笑いし始めた。

「お前何言ってるの？心が家に戻るわけねえじゃん！」

「えっ…？どうゆう意味ですか…？」

「どうゆう意味も、忘れ物つてもしかしてお前のギターか…？」

「あ、そうです」

「それなら心が捨てに行つたよ」

えっ…？

それって…待って。意味わかんない。

「お前心のこと好きなんだってな？」

「えっ…？なんでそのことを…？」

「そんで心と付き合ってるんだろ？」

「はい…」

メンバーはまた笑い始めた。

「お前バツカじゃねえの？心が男と付き合っわけないじゃん！騙されてんだよ、お前は！」

メンバーのその言葉に僕は耳を疑った。

「大体心には彼女がいるんだよ！お前ただからかわれてるだけなのわかんなかったのか？」

そんな…そんなはずない…

「さつきもお前心に電話したろ？心言ってたぜ。『ああ、しつけない。そろそろ遊ぶのやめるか』つつつて、電話切ってたからな。さつき電話切られただろ？」

ウソだ…ウソに決まってる！

「心もそろそろめんどくさくなったんじゃねえの？だからお前のギターもいらねえから捨てにいったよ」

ウソ…

僕はそこに座り込んだ。

そして自分でも気付かないくらい大量の涙を流していた。

「座ってんじゃねえよ！ホモ野郎！さつさと消えろ！」

僕はその言葉にショックを受け、立ち上がりスタジオの扉を開けよ

うとした。

「おい、ちよって待てよ！オレたちに謝りもしねえでいっちまうのかよ！？」

「えっ…？」

「お前はオレたちの気分を悪くしたんだ。謝ってもらわなきゃ…なあ？」

「ウツ…気分を…ヒック、悪くさせて…ヒツ、すいませんでした…」

『あーはっはっはっは！！もう二度と来んなよ！気持ちわりいから！』

メンバーは泣いて笑っていた。

僕はそこから逃げるようにしてでてきた。

もうホントに心の家に戻れない。

心…。信じてたのに…

…もう誰も信じない…

…もう独りでいい…

… 信じたら裏切られるだけだ…

… 誰も信じるもんか…

誰も… … 誰も… …

真実

僕は街をあてもなく歩いた。

今更自分の家にも戻れない。

絶望と深い悲しみが心の奥をえぐっていくのが自分でもわかる。

すべてが闇に染まってしまえばいいのに。

そんな気分だった。

その時とどめを刺すように雨が降りだす。

「ついてないときはホントついてないな…」

もうどうでもいい。

信じてる人には裏切られ、帰る場所もない。

僕には何にもないんだ。。

無意識のうちに車道へと、足がそちらの方へ向く。

なんだか不思議な気分だ。車通りが激しいこの道に飛び出そうとする自分がある。

しかし恐怖を感じない。
むしろ楽になる感じだ。

すべてを失った僕は今自分ですら失おうとしている。

フラフラっと車道へと出ていきそうになった。

「光っ！！！」

誰？

誰の声？

気のせいだな。

今更僕の名前を呼ぶ人なんていない。

僕は必要のない人間なんだから。

「光っ！！光っ？！何やってんの！？」

僕を掴む腕。

由樹だった。

「アンタ何やってんの！？危ないでしょうが！？」

「由樹……？」

「傘もささないで風邪ひくよ?」

そつと僕に傘をさしてくれた。

「うるさいっ!!近づくな!!」

僕は差し出された傘を振り払った。

「何?どうしたの光?何かあったの?」

「うるさい!!お前も心と一緒になんだろう!?僕のこと気持ち悪いと思ってるんだろう?!死ねばいいって思ってるんだろう!」

「何言ってるの!?そんなこと思ってる訳ないでしょ!」

由樹も僕も人が周りにいるにも関わらず大声で怒鳴りあった。

すると一人の男がこちらに駆け寄ってくる。

「おーい!由樹?!どうしたんだ!」

「あつ、冬司さん…大変なの!光が…光が…!」

「光君がどうかしたのか?」

何故か冬司さんも一緒だった。

冬司さんはすごい目をしている僕に少し驚いたが、僕を見てこう言った。

「心と何かあったんか…？」

「黙れ！！心の話なんか聞きたくもない！」

そろそろと野次馬も増えてくる。

「心は僕のギターを捨てたんだ！心には彼女がいたんだ！僕のことめんどくさいって言ったんだ！信じてたのに…本気で愛してたのに…お前らも一緒だろう！？僕のこと心の底では気持ち悪いって思ってたんだろ！？そうだよな！？僕、ホモなんだから！！男なのに男が好きなんだから！…もう誰も信じない！もう…騙されない…」

「心…？何があったの…？」

由樹は僕のほうへ一歩足を踏み出す。

「うるさい！近づくな！由樹だってホントはそうなんですしょ！？もう…騙されない…！」

僕は心のことショックすぎて混乱していた。

すべてを信じられなくなり、すべてを疑った。

「もう嫌だ…もう嫌なんだよ…うわあああああ！」

僕は頭を抱え、のたうちまわる。

こうなると周りの人は冷たい目を通り越して、哀れみのような視線を僕に向けた。

当たり前だ。

大声でカミングアウトをし、その上僕自身が壊れてしまっているのだから。

その時冬司さんは僕の胸ぐらをつかんだ。

「バカ野郎！！心自身がそう言ったのか！？心はオレに言ってたぞ！あいつにはオレしかない。オレにもあいつしかないんだって！だからオレはあいつを守んだって！光君のことをそんだけ大事に思ってる奴なんてこの世に心だけだぞ！心に彼女がいるだあ！？お前こそ心を信じてみる！？好きなんだろ！？愛してるんだろ！？」

僕は冬司さんの言葉を聞き、一瞬落ち着いたがまた狂い始めた。

「うるさい…うるさい！うるさい！！その場にいなかったくせに勝手なこと言っな！」

僕は自分で言っていることが訳がわからなくなっていた。
冬司さんの言葉に動揺したのだろうか…？

パシンッ！！！！

そして由樹は僕の頬を思いっきりひっぱたいた。

「光…私はアンタの味方だよ！！光のこと気持ち悪いなんて思ったことなんか一度もない！信じてよ！光は私の一番の親友なんだから…だから元の優しい光に戻ってよ…」

由樹の言葉に僕は地面に頭をつき、すごい声と共に涙を流し泣いたんだ。

一体誰を信じたらいいのだろう…？

僕が信じなきゃいけないものは一体何なのだろう…？

もう頭の中がそればかりで他には何も考えられなかった。

「心っ！…！」

冬司さんの突然の声と共に僕は顔を上げた。

すると人込みを掻き分け、心がそこに立っていた。

僕の大事なギターを持って。

僕はすぐさま心の元へ走った。

「心…今までどこいったの！？…この怪我どうしたの！？」

よく見ると心は顔にあざがあつたりはれたりしていた。まるで殴られたような…

「ああ、これか？バンド抜けるって言ったら、あいつらに殴られちゃったよ。それだけならまだ我慢できたよ。オレがわがまま言ってるのはわかったからな。でもあいつらはギターを壊そうとしやがったんだ…！光から来てた電話も切られちゃった。だから急いで振

り払ってギターとケータイ取り返して家に戻ったんだ。そしたら光
がないから探してたんだよ」

僕が聞いた話と全然違う…どっちがホントなの??

「お前今までどこに行ってたんだ?しかもこの人だかりは何だ?お
前ら三人でなんかやってたのか?」

「僕はケータイ切られたから心配になってスタジオまで行っただ
よ!そしたらメンバーに心には彼女がいるからお前は騙されてると
か、ギターは心が捨てにいったとかいわれたんだ。だから僕…」

心は僕は抱き締め、こう言った。

「バカ野郎…そんな訳ねえだろうが?好きでもないやつにキスなん
かするわけねえだろうが?それに言っただろ?オレがお前を守ってや
るって。オレの居場所はお前なんだって」

僕はまた泣いた。

心の胸の中で。

心はいつでも僕を想ってくれていたのに。

僕には心しかなかったように、心にも僕しかなかったのに。

一番信じなきやいけない人だったのに。

「ごめんね心…信じてあげられなくてごめんね…」

心は黙って僕の頭をポンポンと叩いた。

「よかったねえ、光!」

少し涙声になってる由樹が言った。

「心もあんまり光君を泣かせるんじゃないねえぞ？」

「ああ、わかってる」

「ごめんね由樹… 由樹にもひどいこと言っちゃった…」

「もういいよ。いつもの優しい光に戻ったみたいだし」

「うん… ありがとう由樹」

「そついや何でお前ら二人でいるんだ？」

顔を見合わせる由樹と冬司さん。

「あつ、そうそう。実はオレら二人付き合つことにしたんだ！」

……………？

「そつゆつことなの」

『ええっ！！』

突然の告白に僕と心は大声をあげた。

せつかく散らばった野次馬をまた引き戻すような声だった。

「マジで?!」

「おう！マジでマジで！！」

「ははっ！そりゃいいや！なあ光！？」

「うん！なんか嬉しいね！」

僕ら4人は雨が降る中、お互いの幸せを感じていた。

僕と心は再び戻った絆を。

由樹と冬司さんは新しく結んだ絆を。

僕はもう心を疑わないと誓った。

そして由樹も冬司さんも大事な人なんだと改めて感じたんだ。

いろんなことが起こった一日だった。

ただ一つ気掛かりだったのが心はこれからどうするかということだった。

結成

僕と心がバンドを抜けて一週間経った。

僕は相変わらず心の家の家事をこなし、心は居酒屋でのバイトをしていた。

「心、明日休みだよねえ？予定あるう？」

「いや、ないけど」

「そつか。じゃあ映画でも見に行かない？見たいのあるんだ！」

「そうだな。たまにはいいか」

「じゃあ決定ね！」

次の日僕らは映画館へと足を運んだ。

「あつ……」

「どうした？」

「見たいの終わっちゃってた……」

「そうなのか？」

「うん…」

「どうするんだ？なんか違うの見るか？」

「ううん。どつかで飯食べよ！」

僕は近くのファミレスへ入る。

平日にもかかわらず人がたくさんいた。

満員らしく入り口で席が空くのを待つ人も見える。

「すげえ混んでるな。他んどこにいくか？」

「待って！あれ由樹と冬司さんじゃない！？」

待っているお客さんの中に二人の姿が見える。

「あつホントだ。ちよつと声かけるか」

店に入り、由樹と冬司さんに話し掛ける心。

「おお！心じゃん！どしたあ？」

「飯食おうと思ったけど、こんだけ待ってるから違うとこにいこうかって光と話してたんだ」

「じゃあ一緒に食おうよ。たぶんオレらもうすぐだから！」

「いいのか？」

「いいよな？由樹？」

「うん！4人だと楽しいじゃん」

こうして僕ら4人は席が空くのを待った。

10分くらい待ったところで席があき、案内された。

みんなそれぞれ注文をし、料理が来るのを待つ。

トウルルルル…

「心さん、携帯なってるよ！」

「あつ、えっ？誰だあこの番号？…もしもし？………あつ！はい！はい！」

心は電話の相手に驚き突然敬語になる。
誰なんだろう？

「あつ、はい！わかりました！はい！失礼します…」

「心？誰だったの？」

「【ひだまり】の松田さんだった…」

「えっ！？なんていったの！？」

「これからのことについて聞かれた…」

「じめん…」

「光が謝る必要ないって」

「どうした心？何の話してんだ？」

心は冬司さんと由樹にデビューの話をした。バンドをぬけたことも…

「そっかぁ…」

「まあ今となっちゃあ断るしかないけどな…」

「諦めちまうのか？」

「今はしょうがねえよな…」

「ねえ？冬司さん？ちよつといい？」

由樹が冬司さんを連れて外にでる。

「どうしたんだろっ？」

「さぁ…？」

料理が全員分運ばれてきたところで二人が帰ってくる。

「どこ行ってたんだ？」

「なあ心？ちよつと相談があんだけど…」

「どしたあ？」

「オレら二人を仲間に入れてくれないか？」

「何のだ…？」

「バンド…に」

「ああん？何だいきなり？」

「メンバー足りないんだろ？だからオレらだったら力になれるかも
しないから」

「お前楽器なんかできたかあ？」

「オレドラムやってたんだよ昔。今は全然だけど…」

「私は最近までピアノやってたんだけど…役に立てないかな…？」

「うーん…」

しばらく無言になる心。かなり考え込んでるみたいだ。

「とりあえずご飯食べてから考えようよ！お腹すいちゃった！」

「そつだな！とりあえず食うか？なあ心？」

「うーん…」

「食べた後言えばよかったかな…？」

「心？心ってば！」

「あつ、何？なんか言った？」

「ご飯食べてから考えようよ！」

「あつ、そうだな」

食べ始める4人。

僕と由樹と冬司さんが楽しくおしゃべりしてる横で一人考え込む心。

食べ終わり黙っていた心が口を開いた。

「なあ二人とも？もしやるんだったら二つ問題がある」

「何だ問題って…？」

「一つはもし、デビューするとなると今やってる仕事をどうするか？もう一つは練習する時間があるからそれまであっちが待ってくれるか。この二つだ」

「仕事のことは心配するな。それはなんとでもなる。由樹ともそれはさっき話したんだ」

「そうそう いざとなったら私も働くし！」

「…………ホントにいいのか？」

「だからいいって言ってるじゃん！こんなチャンスまたあるかわかんないんだろ？」

「わかった…じゃあちょっと電話してみるわ」

そう言つと心は電話をする。

3人とも無言で心の電話が終わるのを待つ。

しばらくすると心が電話を終え僕たちをみる。

「どうだったの…？」

「ああ、…………OKだつて！！」

「マジで！？やったじゃん！！」

「すげえことになったなあ！」

「ただ条件があるんだ」

「何…？条件つて？」

「半年。半年で仕上がるようにしろって。そうしなきゃこの話はなかったことになる」

「半年…」

「よし！やっatarouじゃん！！」

「うん！私たちの力見せてやりましょう！！」

みんなかなり盛り上がっていた。

半年と言う短い期間。

ホントにいけるんだろうか？

「オレも練習しなきゃだしな」

「心はもうギターできるからいいじゃん？」

「いや、ギターは光に任せる。オレはベースをやるよ」

「ええ！？じゃあギター僕一人！？」

「みんな役割があるんだ。頑張るしかないな！」

「う、うん…」

「じゃあさあ！バンド名決めようよ！」

「そうかあ…考えなきゃだなあ」

「じゃあさあ心の名前でいいんじゃない？」

「いや、微妙じゃねえ？」

「かつこいい名前考えても結局あとで後悔するかもしれないだし、
こうゆうのは勢いだよ！勢い！」

「じゃあ心を英語にしようよ！【HEART】って感じ！」

「うん！それいいじゃん！決まりい」

「それでいいのかよ…？」

「だって心の夢だもの！誰も文句いわないよ！ねっ？」

「おうよ！」

「うん」

こうして新バンド【HEART】は結成された。
不安と希望を胸に僕ら4人は動き始めたんだ。

半年

練習初日、僕ら4人はスタジオを借りミーティングを始めた。

「由樹さんはピアノやってたんだよねあ？」

「うん。そうそう」

「でもピアノはちょっと無理だからキーボードをやってほしいんだけど」

「OK!! やってみる!」

「最初は大変かもしれないけど、よろしくな」

こうして役割分担が終わる。

由樹はキーボード、冬司さんはドラム、心はベース、僕はギター兼ボーカルだ。

あと歌によってボーカルとコーラスがローテーションするが、基本は僕に決まった。

「それで最初に歌うのだけど、今まで作ったやつから選ぶか、新しく作るかどっちにする？」

「今までって言ったってオレたち知らねえぞ」

「そういえばこの二人は聞いたことないんじゃない？」

「そっぴやそうだったな」

「じゃあとりあえずどんなのがあるか聞かせてよ」

冬司さんと由樹は心が持つてきた楽譜から1つずつ選ぶ。

「じゃああとこれもやるか」

心が選んだのはあのライブでやった曲【柊】だった。

「じゃあとりあえず由樹から選んだやつね」

心はギターを弾き始める。僕は人前で歌うことに少し慣れたのか緊張もさほどなかった。

少し淋しいギターの音色。それにあわせて僕が歌う。

歌が終わり、由樹と冬司さんを見ると口を開けたまま僕達を見ていた。

「光…すごいねえ…」

「ああ…ありえないくらいうまい…」

「そうかな…？」

「これだつたら確かにスカウトされてもおかしくないね…」

「オレが選んだやつはあとでやってもらうとして、おまえらが選んだやつやってくれよ」

僕と心は顔を見合わせ、互いにうなずく。

この曲はスカウトされるきっかけであり、それと共に別れを思い出させるものだった。

心は再びギターを弾き始める。

切ないメロディーがスタジオを包んだ。

僕はまたそのメロディーに乗るように歌った。

由樹と冬司さんはただ無言で聴いていた。

「どうだった？」

「うん…なんか泣けてくるね…」

「そうだな。詩と曲がすごく合ってる。いつそのことこれにすればいいんじゃない？」

「うん。僕もこれは好きなんだ。心はどう思う？」

「うん…これもいいと思うんだ。だからこれはこれで、あともう一曲新しくつくろう。明るい曲をさ」

「そうだな…最初は明るい曲でいくのも悪くないよな！」

「光？書けるか？」

「うん…頑張ってみるよ」

「じゃあ最初はとりあえずこの【柊】を練習して、新しいのが出来しだいそれもやっつけていこう！」

「よっし！じゃあ頑張ろう」

「やったるかー！」

「っと…その前に…まだそれぞれのパートごとの楽譜ができてないから、次までに作ってくるよ！」

「じゃあ今日は練習できないのね…」

「まあしょうがないだろ」

この日はとりあえず解散になった。

半年という決められた時間。

ただなんなく半年過ぎると、目標があって半年をそれに費やすのでは時間の流れがまるで違った。

一カ月近く経った頃、由樹はバイトをやりながら練習をし課題である【柊】をほぼマスターし、冬司さんは仕事をやりながらも由樹と同じくマスターしていた。さすがに前にやっていただけあって最初はきつかったらしいが、勘をとりもどすと初めの苦戦がウソだったように覚え始めていった。

冬司さんはこれからのためにと一カ月前に仕事をやめると会社に退職願をだし、バイトも見つけたらしい。時間もとれるようになったからもうと練習できるみたいだ。

心も自分のパートを覚え、違う曲のみんなの楽譜を作っていた。

僕はというと、曲は弾けるようになったものの新しい詩が浮かんでこない。

「ねえ、心？ 明るい詩ってどんなふうに書けばいいのかなあ？」

僕と心はいつもの居酒屋でビールを飲みながら話していた。

「光はどんな時にすっげえ楽しい！ って、大笑いとかして今が一番だあ！ って思う？」

「うーん。4人でいるときかな？」

「そうゆうイメージだよ！ それを言葉にすればいいんだよ！」

「そっかあ……」

「あんまり時間もなくて大変かもしれないけど頑張ろうな」

頑張ろうな……か。

こうゆう時に頑張れって言われるとプレッシャーになったりするけど頑張ろうなって言われると一緒にって感じがして、不思議と頑張れるんだ。

家に帰り心が楽譜を書いてる横で僕は詩を書き始めた。

最初に4人で飲んだときのことや、一緒に練習したときの楽しいこと。

それを頭にイメージしながら一文字ずつ書いていった。

「できたあ！！」

「おっ、早かったな」

書き始めてから15分。

今まで書いた中でも1・2を争う早さだった。

「どれ、見してみ」

心が読み始めると、ドキドキしてきた。

初めて読んでもらったときと同じような感覚でドキドキしながらも
なんか恥ずかしいようなそんな感じ。

「うん。これなら直すところないな。文字数もこれなら平気そうだし」

「ホント！？」

「ああ。この詩ならかなりいい感じの曲がかけそうだよ」

「よかったあ…。でも不思議だなあ。あんなに悩んでたのにすぐ書けちゃったから」

「そんなもんだよ。きつと書きたいことがイメージとして固まったからだ。それはすごく大事だから忘れちゃだめだぞ」

「うん！」

それから何日か経ち、スタジオでの練習の日。

「じゃあ今日は新曲の練習にはいるぞ！」

「マジで！？」

「できたんだあ？」

「とりあえず最初は弾いてみるから、聴いてくれよ」

僕も曲ができたことを知らなかったから、少しドキドキした。

心がギターを弾き始める。

それは今までにない曲だった。

きつと聴いていた3人がそう思ったに違いない。

心の歌とギター。

それだけで今までであった辛いことを消し、これからあるかもしれない楽しいことをその曲で味わえるようなそんな感じの歌だった。

心は僕の歌声がすごいって言うけど、心の作曲の才能に比べたら全然かなわないって思ったんだ…

「すごい」

「これすげえいいじゃん！」

「うん！僕の詩がこんなに素敵な曲になるなんて……」

「私たち4人とも何かに包まれてるようなそんな曲ね……」

「じゃあこれで決まりだな！」

『おお！！』

「それで曲名は??」

「冬司、いい質問だ！まだ決まってないのだ！（笑）」

悩む4人一同……

「【^{ひかり}光】ってのはどうだ？」

心が言った。

「それいいね そっか！さっきはなんて表現したらいいかわからなかったけど、光に包まれてるような感じだったね」

「決まりだな！」

「うん！」

新曲も決まり、僕達4人は必死で練習した。

僕も肩の荷が降りたのか、それまでと比べものにならないくらいの上達ぶりで心がすごく驚いてたくらいだ。

そして約束の半年の一カ月前。

「もうほぼこれで完成だな」

「そうだね！僕も歌いながら弾いててもミスあんまりしなくなったし！」

「だから言つたろ？光なら大丈夫ってさ！」

「いや心がいてくれたからだよ。だから頑張れたんだ……」

「おーおー、この二人はみせつけてくれちゃって（笑）」

「いいじゃない それだけこの二人が仲がよくて愛し合ってる証拠だよ」

「由樹つてばからかわないでよお！ねえ、心？……心？」

「ばたっ！！」

突然心が倒れた。

「心！？どうしたの心！？」

僕は、急に倒れ気を失った心を大声で呼び掛けた。

「光君！むやみに動かすな！……意識がない…由樹！！救急車だ！」

「うっ、うん！！」

「心！！しっかりしてよ！心！心ってばあ！！」

今まで元気だった心が急に倒れ、僕はパニックになる。

もうすぐで心と出会ってから三年が経とうとしていた…

悲しみの果て

救急車で運ばれる心。

僕はパニックになっていたのだから救急車に同乗させてもらえず、冬司さんの車で病院へとむかった。

しばらくの間待たされる僕達。

すると医者が部屋からでてきた。

「先生！！心は！？心はどうなんですか！？」

「それは後で話します。桜井さん、意識が戻ったので顔を見せてあげてください」

僕達は言われたとおり病室へ入る。

「おお、心配かけてわりいなあ……」

なんだか苦しそうな心を見てたら涙が止まらなかった。

「大丈夫……？あんまり心配させないでよね……」

「大丈夫だよ。少し疲れただけだ。すぐよくなるからさ」

そう言って心は眠りについた。

「光君……先生のところにいこうや」

「うん…」

僕ら3人は先生がいる部屋にいき、席についた。

「さて…とりあえずあなた方は友達かなにかですか？」

「はい。そうです」

冬司さんが答える。

「そうですか…ご家族と連絡がとりたいんですが…」

「心の具合そんなに悪いんですか!？」

身を乗り出す僕に少したじろぐ先生。

由樹と冬司さんが僕を座らせた。

「あいつに家族はいません」

衝撃的な言葉を冬司さんが口にする。

「えっ…?それってどうゆうこと?」

「光君は知らなかったのか…じゃあ今説明するから…」

「兄弟もいないのかね?」

「ええ。あいつに兄弟はいません。親は心が小さい頃亡くなったと

聞いています」

「そうですか…」

「家族がいなくて何かまずいことでも…？」

「これをあなたがたに話すのは酷かもしれませんが…」

「構いません！！僕にとって家族みたいなものですから！」

「……………。わかりました。桜井さんは…心臓の病気なんです」

！！！！

3人とも言葉を失った。

「ウソ…？だってすごく元気だったんだよ！？」

「だいぶ無理をしてたんでしょう。発作があれだけひどくなって意識がなくなるくらいまで放っておいたのですから…」

「助かる確率はあるんでしょうか？」

「手術をすれば…。ただその成功率も今見ただけでも10%に満たないかと…」

「10%…」

あまりにも低い確率にまた言葉を失う3人。

「手術しないとどうなるんですか…？」

「まだ詳しい検査をしてみないとわかりませんが、そう長くはもたないでしょう…」

………

「家族がいないとそれを承諾することができないんですか？」

「はっ？」

「手術するのに家族の承諾がなきゃダメなんですか？」

「いえ…そんなことはありませんが。ただお金のこともありますから…」

「それだったら僕が払います！何年かかっても働いて返しますから！だから…お願いします…」

「………わかりました。今日はもうみなさんお疲れでしょう？明日にでもいらしてください。手術に必要な書類もあるので用意がありますから…」

「…わかりました」

僕は病院をでて、心之家にむかった。

「これからどうしよう…」

由樹がつぶやいた。

「とりあえず今は心が元気になることだよな…」

「うん。そうだよね…」

「心…大丈夫だよな？僕を一人にしたりしないよね？」

「大丈夫だよ光君。心はそんなにやわじゃない。それから心は光君だけの家族じゃない」

「オレら4人みんな家族だろ？なっ？」

「うん…そうだよね！」

僕は涙を拭き、笑顔を見せた。

家につくと、心がいないことがとても不自然に感じる。
心が隣にすることがこんなにも当たり前になってたなんて…

スタジオから持ち帰った僕と心のギター。

並べるとなぜかとても滑稽に見える。

僕は心の言葉を思い出した。

『明日のことは明日考えればいい』

とにかく今は起きてると考えることがマイナスなことばかりだか

ら、眠ることにした。

次の日、病院へ向かう僕。

全然眠れなかった。

当たり前だ。あんなことがあった後で眠れる訳がない。そのせいか体が重く、なんだか頭がもやもやする。

病院に着き、手術に必要な書類を書いた。

「体調をみて、手術をしますの。。」

「よろしくお願いします…」

先生の部屋をあとにし、心の部屋に行く。

心は薬が効いているのか眠っていた。

「心…僕のこと独りにしないでよね？」

そう言っ僕は心の手をぎゅっと握り締めた。

「すいません。検査の時間ですのでいいですか？」

「あつ、はい」

看護婦さんに言われ僕は病室をでて病院にある庭に行った。

庭にあるベンチに座り、色々思い出していた。

心と出会ったときのこと。心と初めてキスしたときのこと。

すべてが遠いようで昨日のような出来事。

僕は歌を唄ったんだ…

心との思い出の唄。

これからも心と唄っていききたい。

心の隣で

ずっと一緒にいたい。

そんな想いを込めながらしばらく唄ってた。

庭にいる患者さんや付き添いの看護婦さん。

みんなが僕の唄を聴いていた。

「あっ！柊さん！ここにいたんですか！？」

さっき心の病室にいた看護婦さんが僕の方へ走ってきた。

「どうしたんですか？！」

「桜井さんが検査の途中で急変して緊急オペになったんです！」

なんだか嫌な予感がした。

急変？

緊急オペ？

すべてを悪い方向に考えてしまふ。

手術室の前で待つ僕。

由樹と冬司さんも駆け付けてくれた。

外は雨が降っていて、昼間なのに薄暗かった。

「心…なんかいつも僕らが大変なときは雨が降ってるね…でも大丈夫だよ？ねえ、心？」

何時間経っただろうか？

手術が終わり先生がでてくる。

「先生！手術は！？」

首を横に振り、暗い顔をする先生。

「そんな…」

僕は悲しみの果てにいた。こうゆう時は悲しすぎて涙もでない。

何もかもなくした僕は目の前の景色が歪んで見えた。

光と心

「そろそろ準備はいいかあ？」

「バッチリだよ」

「僕のほうも大丈夫!!」

「とうとうこの日がきちまつたなあ……」

冬司さんは何か昔を思い出しているのか突然そんなことをいい始めた。

「あの日からもう2年かあ……やっとオレらもテレビに出られるようになったんだなあ」

そう。心の手術からもう2年が経っていた。

あの日はすべてを失ったと思った。

でもこうしてたくさんの人の前で唄うことができる。

「光？緊張してるの？」

「うん……ちょっとね」

「光君なら大丈夫だ！オレらがついてる！」

冬司さんは笑顔で励ましてくれた。

由樹もまた僕の肩をたたき、笑顔でピースする。

そつだ。こんなところで緊張してる場合じゃない。

これから僕が書いた詩を僕の今までの気持ちを心の曲に乗せてみんなに届けなくちゃ。

僕が書いた詩は心との思い出、由樹と冬司さんの暖かい優しさ。

そして…僕以外にもこの世界に生きてる同性愛であることに苦しんでる誰か。

男が男を好きになるとかそんなの関係ない。

みんな同じ人間なんだ。

認めてくれる人は必ずいる。

それを伝えていきたいんだ。

それが僕の使命。

いや…

「じゃあそろそろいこう！心も準備はいい？」

「ああ、大丈夫だ」

心は生きていた。

あのあと奇跡的に息を吹き返し、回復した。

心も死ぬ瞬間がわかってたみたいだけど、そのとき僕の唄が聴こえてきて戻らなきゃって思ったみたい。

意識が戻ったあと心が僕に言った初めての言葉は、

『おまえのこと守るって言っただろ?』

だった。

心は僕を独りにしなかった。

伝えるのは僕と…心の使命だ。

この後、僕らは『H E A R T』は唄い続けた。

苦しんでる誰かの為に、そして僕ら自身の為に。

光と心（後書き）

初めて書いたから、なんだか最後がわけわからなくなっちゃいました。（笑）でも読んでくれる人がいてすごく嬉しかったです！読んでくれた皆さん ホントにありがとうございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9010a/>

僕とキミの歌

2010年10月21日20時57分発行